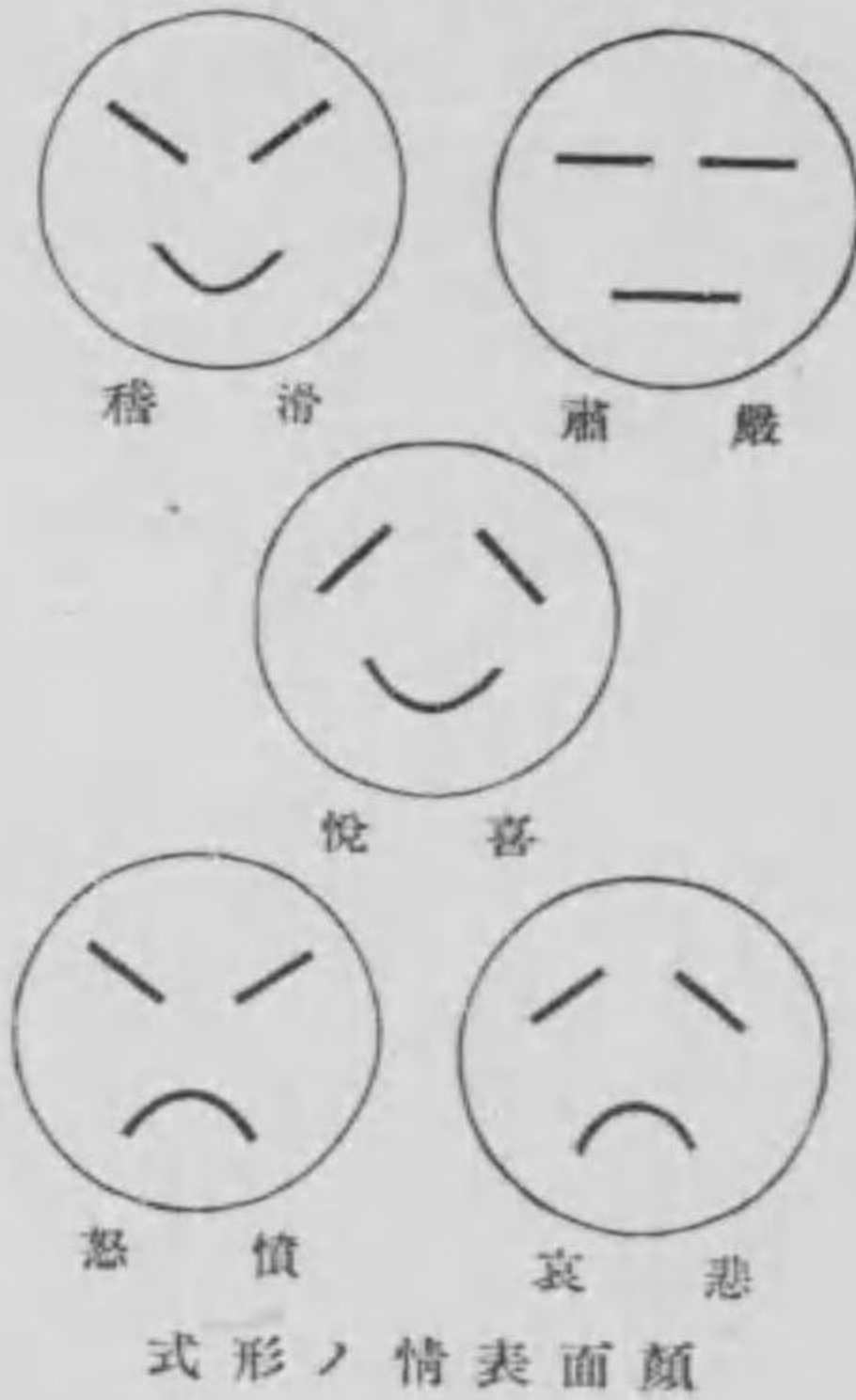


こと、既に説けるが如し。されば、身體の表徴を本として、感情を説明する説あり。例へば、悲しきが故に泣くにあらずして、泣くが故に悲しきなりと説くの類なり。ジェームス、ランゲ説即ち是れなり。(第九章参照) 情緒の表出は、單情に比すれば、更に複雑にして、身體の全部に影響す。其の主なるもの、左の如し。

(一) 單情表出 單情に現はるゝ四種の表徴は、あらゆる表情の基礎なれば、情緒に於ても、是等の表出を見るは言ふを待たず。

(二) 腺及び不隨意筋 情緒の著しく發動する時は、冷汗流れ、涙出で、唾液の分泌止まり、或は毛髮豎立、瞳孔散大、振戦、心機亢進等、自律神經を経て、腺及び内臓諸機能に變化を及ぼす

圖 七 十 三 第



式 形 ノ 情 表 面 顔

を常とす。ジェームス、ランゲ説は此の事實に重きを置きたるなり。(第四章自律神經系の條下参照)

(三) 肢體 情緒は、又、四肢軀幹に影響して、種々の運動を起さ

しめ、或は之を止む。是等は、概ね、現に、自己を保護するに必要なるか、或は、曾て必要なりし動作の現はれなり。例へば、驚きて飛び上り、恐れて動かざる場合

の如し。

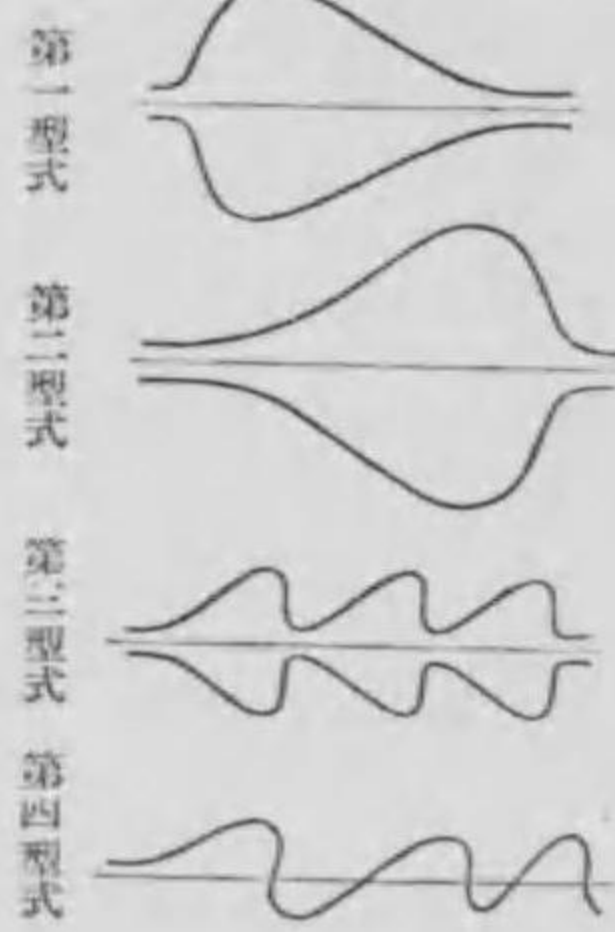
(四) 顔面 顔面は、情緒の特に著しく現はるゝ所なり。就中眼は、最もよく、其の表徴を現はす。其の他、顔面の諸筋肉、口、

顔 面 表 情



鼻等、皆情緒に従ひて、種々の表出をなす。第卅七圖と第卅八圖とは、顔面の運動に由りて、表情の異なる状を、線にて表はしたるものにして、第卅九圖は表情の寫眞なり。是等に由りて、顔面表出の状を察す可し。

圖 十 四 第



第二十三章 情緒

情緒進行の型式 情緒には、概して、興奮と抑鬱との兩要素あり。時間の進行に伴ひて強度を變ず。其の型式に四種あり。

(一) 突然喜ばしき報知に接したる場合には、第一型式の如く、興奮は急に高まり、又急に減ず。抑鬱の場合も之に同じ。

(二) 喜ばしき希望を心中に畫き、或は心痛の事の心に浮ぶ場合には、第二型式の如く、其の情緒は、徐々に高まり、急に減ずるを常とす。

(三) 同一の情緒の永く続く場合には、第三型式の如く、間歇的に、或は高まり或は減ず。要するに、第一及び第二型式の反復なり。

(四) 快と不快、興奮と沈靜との如く、相反對せる情緒の交互に現はるゝ場合には、第四型式の如く動搖す。

中央ノ平行直線ハ感情ノ中和點ヲ示シ、
上部ノ曲線ハ興奮、下部ノハ、抑鬱ノ程
度及ビ形狀ヲ示ス。情緒ハ、スベテ左方
ヨリ進行スルモノト見ルベシ。

第一型式に屬する情緒は、自ら豫期せざるに、外界の刺激に由りて、突發するを常とす。激怒は興奮の代表的情緒にして、驚愕は抑鬱のそれなり。斯る型式を急昇徐降式と呼び、之に對して、第二型式を徐昇急降式と呼ぶ。又第三型式の如く、持續的同種情緒の波動をなすを間歇式と名づけ、第四型式の如く、持續的反對情緒の交替するを交替式と名づく。

考 案

- (一) 情緒と單純感情との別。
- (二) 主なる情緒。其の特色。
- (三) 情緒表出の種類及び實例。
- (四) 情緒進行の型式。

第二十四章 情緒の教育

社交 智識は、書を読み、自然に接して、之を修養し得可しと

雖も、情緒は、主として、社交に由りて養はる。故に、教育者は兒童の社會的教化に注意し、智識と共に麗はしき情緒を養はしめん事を努め、平生、兒童に接する際にも、よく心を用ゐる可きなり。且つ、家庭及び交友の状態に注意し、兒童の感情に影響する事項を研究し、適當に之を教育に應用せんことを要す。

積極的情緒 感情生活の活潑にして、生氣の全身に滿てるは、健全なる兒童の天性なり。故に、教育者は、常に、積極的情緒を以て、兒童を導き、消極的情緒は、努めて之を避く可し。積極感情中に於て、喜悅の情は、殊に必要なり。之を養ふの法一にして、足らずと雖も、概言すれば、兒童の健康に注意し、漫りに、其の天性に逆はざらん事を努め、且つ、教授する課程

の如きも、兒童の智力に適當せるものを選ぶ可し。又、兒童漸く長じては、教育者の彼等に對する理會(認識・賞讃)は、此の情の解發に極めて有効なり。

憤怒 憤怒は積極の情なれども、激發し易ければ、適當に抑制する習慣を、養はざれば、徳性を害する虞あり。憤怒の如き激情を抑制するには、智力作用を營むを可とす。怒り易き性情の者に對しては、教育者は、殊に、沈著の態度を保ち、溫顔を以て之に臨み、徐々に、其の妄怒の不可を諭す可し。西洋にては、腹立たしき時、答をなさんには、先づ、アルファベツト「二十七字を誦したる後にせよとの誠あり。又、我が國に於ても、斯る際には、佛名を三誦せよとの教あり。何れも、此の間に、思慮するが爲めに、妄動を避け得るなり。然れど

も、又、此の情は、幼時に於て、特に著しく現はれ、且つ自護の本能上、必要なる場合多ければ、教育者は、漫りに、兒童の憤怒を非難し、抑制す可らず。適當の憤怒は、品性の修養上、缺く可らざることなり。殊に、公憤の如きは、正義の觀念と伴ひて、徳行を促す場合多し。

憂愁 憂愁は、德育上、時として、必要なる場合無きに非ず。自己の行爲に對して、悔恨せしむる時の如し。然れども、此の情は、概して、精神を萎靡せしむるものなれば、教育者は、努めて、其の發動を避く可し。兒童憂愁に沈む時は、宜しく其の原因を探究して、之が驅除に努む可きなり。

恐怖 恐怖の對象は、兒童の幼時に於て殊に多し。例へば、蛇を恐れ、毛蟲を恐れ、犬を恐るゝの類なり。是等は、概ね、最

初の經驗に、深き驚きと恐れとの印象を得たるに由る。是等の情は、屢相混じて、兒童の幼弱なる精神に強き影響を及ぼし、之が爲めに、性格に變化を來す事さへあり。警めざる可らず。要するに、教育者は、兒童の心より、理由なき恐怖の對象を取り去り、之に代へて、眞に恐る可き物を恐れしめざる可らず。是等の恐怖を減ずるには、其の對象の状態を詳細に認識せしむるに如くは無し。故に、教育者は、豫め、一般に、兒童恐怖の對象を研究し置きて、之に對する適當の方法を施す可きなり。而して、天命理法の如きは、正當に畏敬せしめ、惡疫變災の如きは、漫りに恐怖せしむること無く、之に對する警戒法を知らしむ可し。

自己感情 兒童をして、自己感情を正當に保持せしめん事

は、訓育上極めて必要なり。彼等が、自負傲慢の態度を現はす時は、之を警め、之に反して、彼等が自ら疑ひ危みて、精神の萎靡せんとする場合には、適當に之を勵まし、自ら發憤せしめん事を要す。如何なる場合にも、彼等をして、自己を信ずる精神を失はしむ可らず。

同情 同情は、徳育の基礎となる可き最も大切なる情緒なれば、之が教育には特に注意せざる可らず。教育者が、兒童の同情心を養はんとするには、動物及び人類に就きて兒童の同情を促す可き經驗の機會を逸す可らず。又兒童の經驗界より、種々の教材を取り來り、他人の苦樂に就きて説明し、眼前に見るが如く、想像を畫かしめ、兒童が、知らず識らず話中の人と同一の情緒を起して、終に、之に對する適當の行

爲を實現せんとするに至らしむ可し。斯くせば、唯、命令に由りて、止む無く、道德を行ふ者と異りて、自己の衷心より、湧起せる、感情に由りて行ふ事なれば、徳性上最も有効なり。適當なる同情を多方面に現はすは、其の人格の偉大なる所以なり。

愛情 愛情も亦、徳性と密に相關せり。凡て、教育者は、児童の發する愛情の對象たらざる可らず。實に教育者は、生理的愛情の外、總ての愛情を一身に集め得可し。先づ、衣服態度を正して、児童の感覺を満足せしめ、成る可く永く同一児童を教授して固著的愛情を起さしむ可く、又己、先づ児童に同情を表し、彼等をして己に對する同情的愛情を養はしむ可し。最後に、最も大切なるは、自ら學徳を磨き、児童をして、

己を欽仰するに至らしむ可き事なり。斯くて、公平に、全體の児童を愛し、一室の中、一校の間、藹然たる和氣を以て満たさるゝに至らん事を努む可し。同情及び愛情の如き、主他的情緒は、相互的にして、己先づ人に對して、是等の情を表はさば、人も亦之を表はすに至るものなり。故に、教育者は、常に、身を以て、児童を率ゐざる可らず。

愛國心 愛情は、各種の徳行に必要なものなるが、就中國家に對する愛情は、國民教育上、最も必要なれば、其の教養には、特に注意す可し。歴史及び地理は、愛國心を養ふに、最も適當なる教科なり。初は、國史に關する神話、傳説等より、次第に進みて、我が國體並びに我國の世界に於ける地位及び其の發展の状態等を知らしめ、以て、児童の愛國心を涵養す

可し。又、修身科に於て、古今の志士仁人が、國家に盡したる事蹟を教へ、唱歌に於て、忠愛の情緒を謠はしむるが如きも有効なる方法なり。郷土史は、愛郷心の涵養に必要なると共に、延いては、愛國心の基ともなれば、其の教授には、特に意を用ゐざる可らず。

表出 感情の表出に注意するは、教育上特に必要なり。教育者は、兒童の言語動作顔色等より、其の感情の發動を察知し適當の處置を施す可し。例へば、烈しく發情せる者に對しては、先づ、懇に、其の身體の不安を慰め、常態に復せしむるの類なり。

尊敬及び感謝 他人の優秀なる美點を發見して、之を敬重するは、人の美德なり。兒童には、幼時より、此の感情の發發

に機會を與ふ可し。少年及び青年期には、動もすれば、輕薄に馳せて、先輩を凌がんとするの傾向あり。深く警めざる可らず。又祖先を崇敬し、古老を尊重するは、我國古來の美風たり。教育に於ては、特に、此の點に注意し、尊敬の情の修養に努めざる可らず。恩を受けて之に感ぜざるは、人として、最も恥づ可き事たり。訓育に於ては、特に感謝の情の啓發に注意せん事を要す。前章にも説きたるが如く、此の情は、恩を知るを以て始とす。故に、兒童をして、其の直接する具體的事實に基き、他人より受くる恩誼を明に認識せしむ可し。又、如何なる場合にも、他人より受けたる厚意に對して、感謝の意を表する習慣を養はしめん事を要す。

非社會的情緒 概して言へば、非社會的情緒は、努めて發動せざらしめん事を期すべし。反情も憎惡も、誤解及び我儘に基くこと多ければ、教育者は、よく其の原因を探究して、適當に融和を圖る必要あり。侮蔑は、殊に、己の徳を損するものなれば、嚴に之を警めざる可らず。然れども、惡逆不徳の人に對しては、是等非社會的情緒を發するを以て、却りて己の品性を確むる場合もあれば、是等の情緒も、漫りに抑壓す可きに非ず。唯、斯る場合には、深く自ら己を省みて、警むる所あらしむ可し。

考 案

- (一) 情緒教育の方法。
- (二) 積極的情緒を解發せしむ可き所。
- (三) 憤怒及び恐怖の教育的注意。
- (四) 自己感情と教育。
- (五) 同情及び愛情の教育。

- (六) 愛國心養成法。
- (七) 表情と教育。
- (八) 尊敬及び感謝の情の教育的價值。
- (九) 非社會的情緒の處置。

第二十五章 慾望及び其の教育

慾望 美麗なる物、美味なる物は、何人も、好みて、之を得ん事を欲す可く、又、進みては、智識、名譽の如き、無形の物をも、之を得ん事を望む可し。之を慾望と云ふ。斯る衝動は、概ね、快感の刺激に由ることなれば、慾望と、感情とは、密接の關係あり。故に、慾望を以て、感情の強度激しきものなりと説く學者あり。然れども、慾望には著しき衝動性ありて、行動に導くを以て、意志に彙類するなり。

慾望と衝動 衝動は、自然に起る運動にして、目的表象明瞭ならざれども、慾望は、各自の經驗より、或る缺乏感を生じ、之を充さんとして起る作用なり。されば、必ず、**目的表象**あり。例へば、吾人が、饑餓を感じて、食を欲するの念起るは、衝動にて、一定の食品を選びて、之を食せん事を思ふは、慾望なり。

慾望作用の分解 慾望には、精神三方面の總ての作用を包含せり。例へば、或る食物を慾望する場合に、理智作用としては、饑餓感覺及び、其の食物知覺先づ生じ、或は之に伴ひて、曾て、之と同様な物を食したる時の表象生ず可し。而して之と共に當時の快感喚起せらる可し。是れ感情作用なり。是に於て注意は、食物の心象に集中せられ、動神經は、此の衝動を始む。是れ、即ち意志作用にして、慾望の主要なる性質なり。

慾望の種類 慾望の數は、殆んど、限無しと雖も、便宜上、分ち

て、二種とす。

(一) **一體慾** 吾人の肉體的要求は、其の初め、自然の衝動として現はるれども、進みては慾望となる。前例の如く、飢ゑたる時、食を擇ばざりし衝動が、特殊の對象を定めて之を求むる慾望となるが如し。飲食、性慾、睡眠、休息等、總て肉體上の要求を充さんとする慾望は、皆之に屬す。喫煙、飲酒、其の他の嗜好物も、亦、特殊習慣的體慾なり。

(二) **心慾** 吾人は、又、許多の精神的要求を有す。之を分ちて二種とす。

(イ) **個人的慾望** 他人に關係なく、個人的に起る精神的慾望は、皆、之に屬す。生命所有、智識等の諸慾望は、其の主要なるものなり。

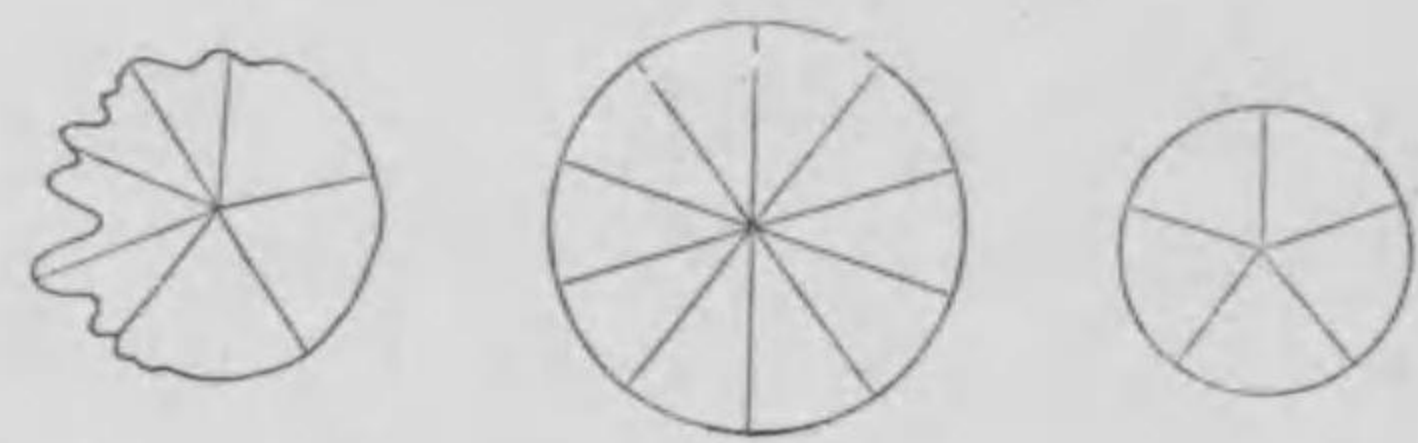
(口) 社會的慾望 社會的關係より起る精神的慾望は、皆、之に屬す。社交名譽、優勝、權勢、秩序等の諸慾望は、其の主要なるものなり。

偏向及び性癖 吾人の慾望が、一方に傾きて、其の勢、猛烈に至れば、病的となる。例へば酒色に耽溺せる者は、妻子の凍餒をも顧みずして、全く、其の奴隸となる事あり。又、名譽心の盛なる者は、如何なる陋劣なる手段を以てしても、自己の名譽を揚げん事に腐心す。此の如く、或る種類の慾望、屢、反復せらるゝ時は、強き習慣となりて、管制し難きに至る可し。之を偏向と云ふ。偏向の一層甚しきものは、即ち、性癖なり。

慾望の教育 慾望は、吾人の身體を保ち、且つ社會の進歩を促すに、大切なる精神作用なり。

人類が、未開の状態より、今日見るが如き燦然たる文華に進

圖 一 十 四 第
圖 ノ 達 發 望 慾



幼時、慾望ノ少
クシテ小ナルヲ
示ス。

年齢ノ進歩ト共
ニ、慾望ノ増加
ト、其ノ發展ト
ヲ示ス。

慾望ノ偏傾ニヨ
リ、人格ノ缺陷
ヲ來スヲ示ス。

みたるも、其の基く所は、各人の内面に活動せる慾望の生産に外ならず。人若し、慾望を缺かば、社會のあらゆる進歩は、全く停止す可し。然るに古より之を卑みたるは、下等の情慾に耽るを警戒たるにて、一般には、決して、卑む可きものにあらず。教育者は、よく、之を察し、兒童をして、心中に、高尚なる慾望を起さしめ、且つ、各種の慾望を、調和的に發達せしめん事を期す可きなり。

慾望の抑制 然れども、一旦慾望の教育を誤りて、病的状態

に陥らしめば、其の兒童は、慾望對象の爲めに、全精神を支配せられて、所謂慾望の奴隸たるに至る可し。故に、教育者は、兒童をして、弊害ある慾望若しくは、偏傾せる慾望を、抑制せしめん事を要す。種々の慾望を調節して、各其の宜しきを得しむるは、品性の修養上、必要の事なり。身體の健康は、慾望調節の基礎なれば、體育には、殊に、意を用ゐざる可らず。秩序の習慣 慾望の節制に、最も有効なるは、秩序の習慣なり。兒童をして、起居飲食勞作勉學遊戯等、總ての事に就きて、一定の時間を守らしめ、自然に秩序を愛し、不規律を厭ふに至らしむ可し。慾望中、體慾は、最も、偏傾し易きものなれば、特に、注意せざる可からず。又、多くの兒童中には、或る種の心慾、特に強烈なるものあり。是等の者にも、適當に注意

し、其の偏向を防ぐ可し。是れ亦、一時の抑制を期せずして、自然に習慣たらしめん事を要す。

考 案

- (一) 慾望と衝動との別。
- (二) 慾望作用の分解。
- (三) 慾望の種類。
- (四) 慾望と教育との關係。
- (五) 古來慾望を卑みし所以。
- (六) 慾望調節の方法。

第四編 思想階級

第二十六章 思想作用

思想 吾人の精神、一定の發達をなしたる後は、事物を、個々に感覺知覺して、満足する者に非ず。必ず各事物相互の關係を明らめ、或は之を彙類し、或は之を總合する等、具體的對象を離れて、精神作用を營むに至る可し。之を思想と云ふ。凡て思想は、或る事物と、他の事物との關係を明らめ、之を既有の經驗に統合す。吾人が、橙を見て、柑橘類なりと判斷するは、先づ柑橘類の性質と、橙の性質との關係を知り、之を他の果物と區別して、柑橘類に統合せるなり。吾人の智識は、知覺に由りて、直覺的に事物を経験すると共に、思想により

て、既有的の經驗に統合するに及びて、一層確實に進む。而して、思想に大切なる作用は内省なれば、教育上内省の重要な事、言を待たず。

類化 既有的の智識に、現在の新しき經驗を統合する作用を**類化**又は**統覺**と云ふ。類化作用は、總ての階級に存在すれども、思想階級に於て、特に著しく現はる。吾人の精神は、常に、内省によりて、類化作用を現はし、事物を理會し得るなり。若し、全く此の作用存在せずんば、吾人は、其の事物に就きて、唯、漠然たる感覺を生ずるのみにて、眞の智識を得る事能はざる可し。此の如く、類化作用の廣く行はれて、精神作用中殊に大切なるは、元來、吾人の意識に、**根本的統一性**あるに由る。

類化の要素 凡そ類化作用の行はるゝには、左の諸事情必要なり。(一)は、客觀的事情にして(二)は、主觀的事情なり。前者は類化せらる可き**新經驗(所化表象)**にして、後者は、**新經驗を類化すべき主表象(能化表象)**と、**注意**となり。是等の諸事情、適當に働きて後、始めて、事物の理會行はる。教育上に所謂**教段**は、全く、類化の要件を満たして、其の作用を確實ならしむる爲めに設けたるなり。

兒童の類化 兒童は、能化表象、充分に發達せざるが爲めに、成人の思料せざる誤解をなす事あり。曾て、幼稚園の幼兒に、「地球圖」を示したるに、「兎網の繪なり」といひ、又天長節の唱歌中にある、「大君」を「扇」と理會せし者あり。故に兒童の精神に就きて、研究せざれば、彼等が、正しく理會せしや、否やは、容

易に知る可らず。斯く兒童は、新なる事物に接する時、細く観察せず、又其の特徴に注意せず、唯、其の狭き經驗に於て見聞せし既知の事物と比較し、皮相にして且つ部分的なる類似を見て、直ちに之を類化する弊あり。故に新事物を教ふる時、輕々に之を兒童既知の經驗に關係せしむ可らず。是れ不精確なる観察と、皮相の類化とを助長し、將來に非常なる惡影響を残せばなり。

考 案

- (一) 思想作用の説明。
- (二) 類化の説明。
- (三) 兒童の類化。

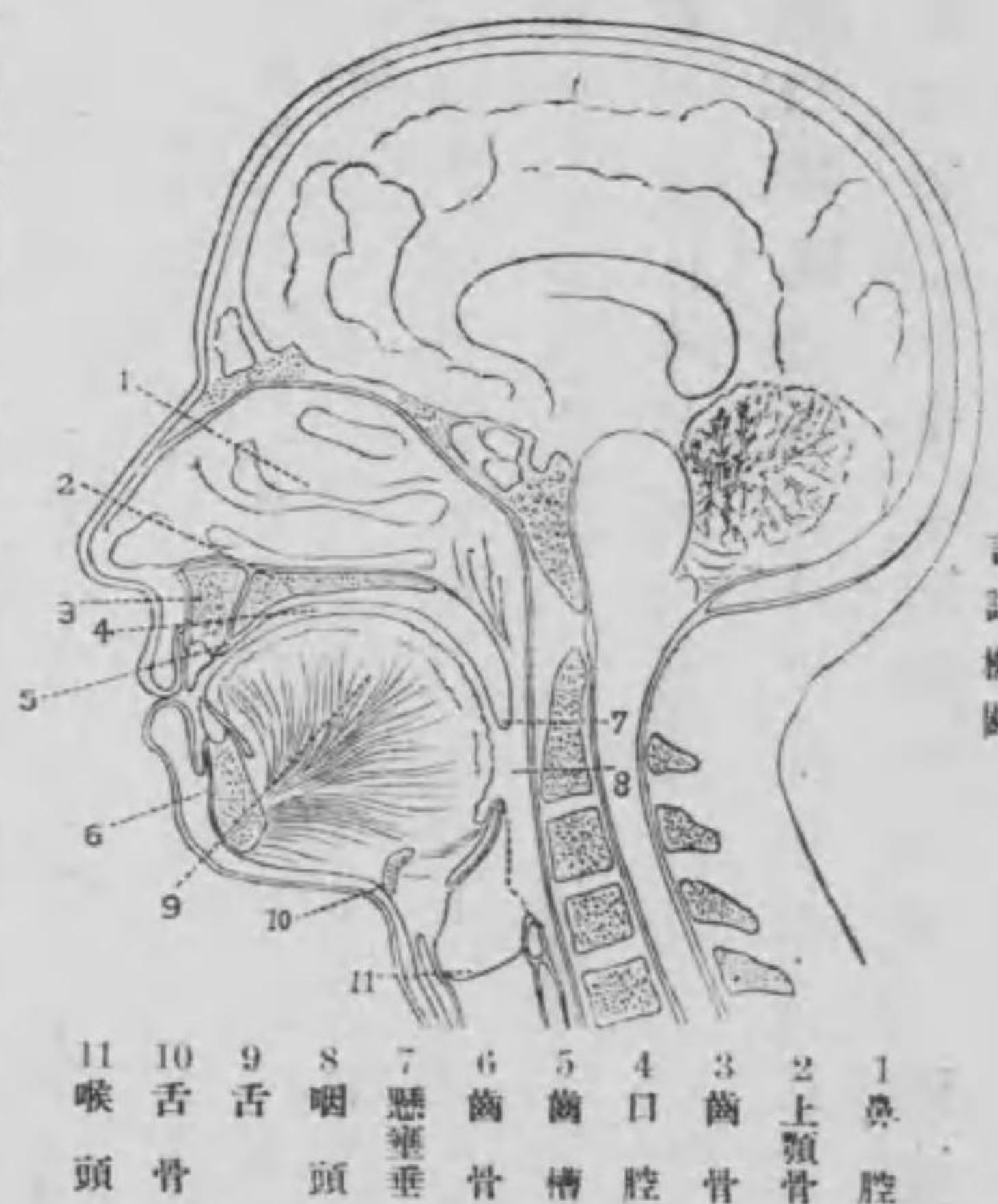
第二十七章 言語及び其の教育

言語と文化 音聲形状運動等の助を假りて、自己の思想感情等を表出するを言語といふ。言語の萌芽とも見る可きものは、動物の間にも存すれども、人類に至りて、最も高き發達をなせり。人類が、生物中最高の理智を有するは、種々の原因ある可しと雖も、其の主要なるものの一は、言語の完全なる事なり。蓋し言語は、啻に、現在直接に、各自の思想感情を交通し得るのみならず、又之を文字に記して、後世に傳へ得るを以て、後人は、之に由りて、よく先人の智識經驗を繼承して、更に文化の發達を圖り得るなり。若し、人類社會に言語無きか、假令、之もあるも、不完全にして、文字を缺かば、各個人の經驗は、一代にして消滅し、後代の者は、更に同一經驗を反復するに過ぎずして、進歩は永遠に期す可らず。されば、人

類今日の文化は、實に言語の賜なりといふも可なり。
言語と思想 言語は、全精神作用と關係せりと雖も、就中密接の關係あるは、思想なり。低級なる思想作用は、吾人が今日用ゐるが如き言語無きも、よく行はる。然れども、少しく高き思想は、到底言語無くして行はる可きにあらず。蓋し言語と思想とは、互に相待ちて發達し、思想あれば言語あり、言語あれば思想之に伴ふを常とす。動物に完全なる言語を缺く主なる理由は、其の思想を缺くが爲めなり。人類に在りても、内容精確なる多くの言語を有する者は、其の思想の豊富なる事を表明し、之に反する者は、其の貧弱なる事を表明す。言語は、斯く思想と密接せるを以て、動もすれば、内容の空虚なる言語行はれて、吾人を惑はす事あり。警めざる可らず。

る可らず。

圖 二 十 四 第



言語機關

言語の種類 言語を廣義に解する時は、思想感情等を發表し得るものは、皆其の範圍に屬せしめ得可し。故に身振、手眞似、顔容等による種々の運動も、亦一種の言語なり。之を身振語といふ。身振語は人類發達の初期及び個人の嬰兒期に於ては、盛に行はると

雖も、到底精密なる精神内容を表出するに適せざるが故に、文化の進むに従ひ、次第に廢れて、僅に音聲語の補助として行はる。
 音聲語は、吾人が普通に言語と稱するものにして、聽覺に由りて行はる。

人類の音聲は、他の動物に比すれば、其の種類頗る多く、複雑にして、各種の思想を自由に表明するに適す。是れ發聲機關の最も完備せるに由る。第四十一圖は、人類の發聲に要する機關を示したるものなり。音聲語が身振語に優りて發達したるは、音聲が言語の手段として種々の便利を有するを以てなり。

筆記語は、一定の徽號を用ひて、音聲語を寫したるものにして、視覺を以て聽覺に換へたるなり。是れには、繪畫文字其の他の徽號あり。就中主として用ゐらるゝは文字なり。文字にも、象形文字、表音文字等種々の別ありと雖も、何れも音聲語の一時に消滅する缺陷を補ひ、吾人の思想を永く留めて、他に傳達するを目的とす。

言語の發達 吾人は、生れながらにして、自己の思想感情等を表出せんとする衝動を有す。感覺機關が刺激に接すれば、之に應じて、種々の運動を生ずるを以ても、之を察す可し。

就中、是等の表出手段として、最初に用ゐらるゝは身振なり。初生兒の亂雜運動も、亦一種の表出に外ならず。之に伴ひて生ずるは、發聲なり。發聲は主として有機感覺に伴ふ感情の表出なれば、嬰兒が最初に發する音聲語を情調語といふ。生後數月の間は、母音及びマ・バ・ダ等の發音し易き音を無意義に發するに過ぎず。是等の發音は必ずしも感情の表出には限らず、單に發聲機關の遊戯たる場合多し。此の場合には、各種の音を反復して、亂雜に發音す。之を喃語といふ。

斯くして、生徒一年前後に達すれば、盛んに各種の發聲を摸擬す。之を擬似語といふ。犬・猫・鼠等と呼ぶに其の鳴聲を以てするの類なり、又此の頃より、一般に成人の語を摸擬せ

んとする傾向を生ず。二年前後に至りて、特に盛なり。此に至りて、初め個人的に起りし言語は、社會的發達をなすの基礎を得るなり。凡て、言語は、社會的生產なれば、兒童の場合に在りても、朋友及び成人との接觸に由りて、次第に發達す。成人の言語を模擬するは、即ち語を理會し、句を習得する所以なり。兒童は、生後一年乃至三年の間に、よく其の母語を習得し、彼等の生活に不便を感ぜざるに至るを常とす。以上は、主として、音聲語の發達を述べたり。筆記語は、之に後れ、通常學齡期に入り、教育に由りて習得す。讀方綴方書方は、此の語の習得に必要な手段なり。言語教育 初歩の教育には、種々の教課ありと雖も、教授上主要なるは思想の手段たる讀書算の三科に熟せしむるに

在り。而して算術を除く外、孰れも言語の習得にあらざるは無し。之を以ても、言語の教育上に於ける地位を察す可し。されば、幼時より、精確に、上品に、談話せしむる事と、其の内容を豊富ならしむる事とは、教育者の殊に意を用ゐる可きことなり。言語が思想表出の必要上より生ずることを察すれば、兒童をして話方に習熟せしめんには、先づ彼等に思想を得しめざる可らず。其の思想を養はずして、唯其の表出に努むるは、本末を誤れるものなり。斯る教育は、徒らに口舌の人を作るに過ぎず。綴方に於ても、亦然り。彼等の精神内容さへ豊富ならば、之を表出せんと、衝動は、自ら強く動きて、作文も容易なる可し。讀書は、教育上殊に必要な手段なり。讀書には、視覺聽覺を要するは勿論、發聲機

關の運動にも、複雑なる作用を要す。又其の意義を理解する爲めには、聯想、記憶、類化等の諸作用と共に、思想作用を必要とす。通讀して直ちに之を理解するは、是等諸作用の同時に行はるゝにて、頗る複雑なる練習を経ざる可らず。教育者は、是等の過程を考へ、習熟せる成人の精神を以て、幼弱なる兒童を律する事なく、讀書の教授には、特に意を用ゐる可きなり。

考 案

- (一) 言語の定義。
- (二) 言語と文化との關係。
- (三) 言語と思想との關係。
- (四) 言語の種類。
- (五) 言語發達の過程。

(六) 言語教育上の注意。

第二十八章 概 念

概念 吾人の精神生活は、日々の經驗に由りて、其の收受する表象の種類漸く多く、且つ、同一表象を屢、反復するに至る可し。斯くして、其の許多の表象の相似たる部分は、類化作用に由りて、統一せられ、一種の概括的表象を形成す。之を概念といふ。概念を形成するには、二箇以上の表象を経験せざる可らず。而して其の表象の性質に就き、相似ざる不必要の點は、之を捨て(捨象)必要の點のみ抽き(抽象)て概括す。故に表象は具體的なれども、概念は抽象的なり。表象には之に適合する客觀的對象あれども、概念には之なし。吾人

の思想は、主として、概念に由りて行はる。
概念の構成 概念の構成には、(一)観察 (二)比較 (三)抽象 (捨象) (四)概括 (五)命名の五階級あり。例へば、甲の馬にも非ず、乙の馬にも非ずして、唯、廣く馬と云へる表象を生ぜん爲めには、先づ、甲乙丙丁等の馬に就きて、充分に観察し、且つ、是等を互に比較せざる可らず。斯くする時は、必ず、互に相似たる點と、然らざる點とを發見すべし。而して、其の似ざる點は捨象し、似たる點のみ抽象して、之を一に概括す。斯く概括したる表象に、馬といふ名稱を付するは、即ち命名なり。是等の作用中、比較は關係を發見する作用にして、概括は、類化の作用なり。

概念の階級 吾人は、先づ形ある概念を作り、次第に進みて

形無き物に及ぶ。例へば、犬といひ馬といふは、共に概念なれども、是等のものには、略、同類の型式あり、進みて、犬馬等を概括して、獸類といふ時は、形を以て現はすこと、漸く、不完全なれども、猶、代表すべき型式あり。是等の階級に屬する物を**普通表象**又は**總念**と名く。一層進みて、動物に至りては、全く、形を以て現す可らず。更に**生物**といひ、**物**といふに及びては、抽象の度、益、高く、**言語**(名稱)を以てするに非れば、到底、之を現はす可き方法無し。故に、言語無くして、意識に現はし得可き概念は、低級にして、必ず、之を要する物は、高級なりとす。

内容及び外延 人あり、吾人に問ひて、犬とは如何なる物か、と言はゞ、吾人は之に答へて、四箇の足と一箇の尾とを有し

毛皮にて蔽はれ、一尺乃至三尺の高さを有し、鼻の尖れる家畜なり」と云はん。是れ犬といへる概念に、以上の事項を包含せるを以てなり。之を**概念の内容(内包)**といふ。而して此の内容を有せる犬の概念は、之を何れの時、何れの國の犬にも適用する事を得可し。之を**概念の外延**といふ。吾人若し、犬といへる廣き概念に冠するに、日本の二字を以てせば、其の内容は、日本犬に特別なる性質加はりて、其の數を増す可し。然れども、外延は、我が國の犬に限られて、其の他に及ぶ事能はず。故に、外延の大小と、内容の大小とは、其の關係反比例をなす。

兒童の概念 兒童の幼稚なる間は、概念作用充分に行はれず、僅に低級概念の形成せらるゝのみ。又兒童と成人とは、

經驗を異にし、興味を異にせるが故に、同一概念の内容も、同じからず。概して兒童の概念は、其の内容貧弱にして、不完全なり。兒童が最も興味を有するは、事物の**用**及び**運動**等なれば、是等を以て、内容とする場合多し。然れども、年齢の進み、智力の開くるに従ひ、其の内容漸く、豊富に、且つ、完全に進む。

考 案

- (一) 概念成立の實例。
- (二) 概念の階級。生物學上の實例。
- (三) 兒童の概念と成人の概念との比較。
- (四) 概念の内容と外延との關係。

第二十九章 概念の教育

概念の必要 唯、數冊の書を藏せる者は、箇々の書籍を記憶し、且つ、其の所在をも諳んじ得ければ、特に之を分類するの必要無かる可し。然れども、數百冊若くは、數千冊の書籍を藏せる者は、必ず、之を適當に分類し、或は書架に排列し、或は書匣に收め、其の目錄を製して内容を明にする等、整頓に努めざれば、其の搜索に不便なる可し。

吾人の經驗を積み、智識を増すに従ひて、概念を要する事、亦此の如し。概念は、箇々の同種類なる具體表象を統合して之を一の名詞にて代表するが故に、大に精神作用を簡にして、記憶に便なり。是れ宛も、一の書匣に、多くの同種書籍を容るゝに異ならず。又、一概念中に含まれたる多くの表象には、必ず、通有の性あるが故に、一概念の内容を知らば、之と

共に、多くの表象の性質を知ることを得可し。

凡そ、吾人の智識は、概念を外にして進歩す可らず。科學も哲學も、概念作用に由りて成立す。而して、又、是等の目的は吾人の概念を完全ならしむるに在り。概念の用、亦大なりといふ可し。

概念の基礎 此の如く、概念は、吾人の智識を高むるに必要なるものなれば、之が教育には、特に注意せん事を要す。兒童に、正しき概念を與へんには、先づ其の内容となる可き感覺知覺表象等を正確ならしめ、一概念の喚起せらるゝ毎に其の内容をして、明に意識に現れしめざる可らず。若し然らずして、内容無き概念(名稱)を強ひて記憶せしむるが如きは、全く心理法に背きたる教育なり。斯る誤謬は、修身科の

教授に於て、特に、多きが如し。例へば、仁義忠孝の如き、無形名詞を教へて、其の内容を疎にする場合少からず。是れ學校教育に於て、修身科が、重きを置かるゝに拘らず、其の効果を收むること少なき理由の一なり。

具體的觀察 修身科たると、又、一般智識的教科たるとを問はず、一の概念を與へんが爲めには、必ず、其の構成法に従ひ、先づ、其の内容を具體的に示し、次第に進みて、抽象概括し得可らしむ可し。元來、人の智愚は、其の概念内容の精粗に由ること多きものなり。例へば、同一名稱にて呼ぶ、魚といへる概念も、智識の乏しき者の有せる内容は、唯、日常眼に觸るる四五の魚類に止まれども、専門家の概念には、無數の魚類を包含せるが如し。故に、兒童に、概念を與ふるにも、其の發

達の程度を測り、次第に内容を精密ならしめざる可らず。又、概念の階級に注意し、先づ總念より、次第に進みて、全く、抽象したる高級の概念に及ぼす可し。

概念と教科 概念の練習は、何れの教科に於ても、行ひ得可しと雖も、特に、之に適當なるは、**直觀教授**（實物教授）を用ゐる教科なり。直觀教授は、具體的觀察に基くが故に、概念の基礎を養ひ、且つ其の作用を練習するに適す。随つて**理科**は、概念の練習に、最も必要なり。又、綴方、修身科等に於ても、之を練習し得可し。

教授の目的 教授は、智識と技能とを與ふるを目的とす。而して、智識は、概念によりて成立し、技能も、亦、概念の指導によりて進む。されば、教育者は、其の智識科たると技能科た

るとを問はず、常に兒童をして、教ふる事項の正確なる概念を得しめん事を期す可きなり。

考 案

- (一) 概念に由りて精神作用を簡便ならしむる實例。
- (二) 概念内容分析の實例。
- (三) 概念の練習法。
- (四) 概念に於ける同形式、異内容の實例。

第三十章 判斷及び推理

判斷 吾人机上の書籍を見て、其の書籍たることを知るは知覺作用なるが、又一種の原始的判斷なり。故に判斷は、智力作用の初歩より存すれども、上述の如き場合に在りては特に、自ら判斷せりとの意識なくして行はるゝを常とす。

是等の作用を、直覺判斷といふ。然るに、思想階級に屬する判斷は、明に自己の意識に由り思慮して、行ふものなれば、之を思慮判斷と名く。思慮判斷は、思想作用中、重要な地位を占む。蓋し思想の本質は思慮に存す。元來判斷とは、二箇の概念(又は、表象)を比較して、其の間の關係を定むる作用にして、之を言語文字に現はしたるものは、論理學に所謂命題なり。例へば、兒童が「雀」といふ概念と「鳥」といふ概念とを關係せしめて「雀は鳥なり」といふが如きは、即ち命題にして、一種の判斷なり。此の如く、判斷作用は、言語に由りて明瞭となる。之を以ても、思想と言語との關係の密なる事を察す可し。

判斷の性質 概念に包含せられたる屬性を、分解して、明瞭

ならしむる點より言へば判斷は、分析的に作用す。例へば「鐵は重し」といふが如し。之に反して「鐵は藥用に供す可し」といふが如きは、鐵に固有の屬性を分解したるに非ずして他の關係より知られたるものを附加したるなれば、此の判斷は**總合的**に働けるなり。凡て、判斷は、是等二種の作用に由り、吾人の經驗に秩序を與へて、益、明確ならしむ。

推理 複雑なる事項は、唯、二箇の概念の比較に基ける判斷に由りては、決定し難きことあり。是に於て、推理と名くる、複雑なる判斷生ず。**推理**は、既知の經驗に基き、未知の事項を推度する作用にして、二箇或は二箇以上の判斷の關係を定むることによりて成立す。例へば「總て金屬は熱に熔解す」といへる判斷と「鐵は金屬なり」といへる判斷とを關係せ

しめて「故に鐵は、熱に熔解す」といへる斷案を下すが如し。之を論理學にて**三段論法**といふ。即ち**推理の形式**(推測式)なり。

推理の種類 論理學の區分に從へば、推理の形式に、歸納法と演繹法との二種あり。

(一) **歸納法** 同様なる事項を、多くの同様なる場合に、經驗する時は、總ての場合に同様なる可しとの**確信**を生ずるに至るものなり。曾て四年三ヶ月の一男子が、己の父も、親族の從兄の父も、隣家の朋友の父も、夏期に於て、旅行せるを経験し、「夏には父は皆旅行する者なり」との斷案を下したる事あり。此の如きは、即ち、一の歸納作用に外ならず。然れども、是等は、單に、自然の形式に從へるものにして、其の

斷案の誤謬たること固より明なり。眞の歸納推理は、精密なる觀察と實驗とを重ね、充分なる思慮を費し、確實なる根據を得て、始めて、全體の判斷を下すにあり。歸納法の一般的性質を云へば、特殊の事實を總合して、一般の法則を設定する作用なり。

(二) 演繹法 五年二ヶ月の一男兒曾て、或る教師の屋根より落ちて、負傷せる談話を聞けり。後、此の兒に對ひて、教師にならずや」と言ひしに、否みたれば、其の故を問ひしに、教師にならば屋根より落つ可し」といへり。是れ、此の兒は、教師は屋根より落つる者なり」との命題を、教師全體に關する事として、斯る斷案を下したるなり。一般の法則を應用して、特殊の事實に判斷を下す作用を演繹法といふ。故に演繹法

は歸納法と、正に相反せり。右に擧げたる例の如きは、唯其の形式の演繹的なるのみにして、其の推理は固より、不正たるを免れず。凡て、推理作用に於ては、其の形式は、完全なるも内容の不完全なるものは、誤謬に陥る可し。故に演繹法に於ても、其の前提に用ゐる原則の性質に深く注意せざる可らず。

比論及び臆說 歸納演繹二法の直ちに行はれ難き場合には、比論或は類推と名くる一種の推理法を用ゐる。比論は即ち、或る事物の二三の點が、他の事物に似たるが故に、他の點に於ても、多分同一なる可しと、推度する作用なり。臆說は、確實なる歸納法の斷案を得ざる間、或る事實を説明せんが爲めに設くる假定の原理なり。故に又假說と名く。

然れども、臆説なりとて、隨意に、空想を逞くしたるものたる可らず。必ず、實際に適合し、且つ、既に、一般に認められたる學説と矛盾す可らず。此の如くにして成りたる臆説は、其の根據確實なるが故に、實驗、觀察の結果、多くは歸納法の斷案と同一に歸し、終に一箇の學説として、承認せらるゝに至るものなり。

考 案

- (一) 判斷と推理との關係。
- (二) 歸納法の實例。
- (三) 演繹法の實例。
- (四) 比論と歸納法との別。
- (五) 臆説と學説との關係。

第三十一章 判斷(斷定)及び推理の教育

判斷 教育に活氣あらしめんには、常に、兒童を導きて、自ら判斷せしめん事を要す。蓋し、成人には、熟知せられたる事項も、兒童が自己の智識より判斷せし時は成人の一大發見をなしたると同様なる愉快を感じる者なり。此の如くせんには、前章にも、屢、説きしが如く、兒童既知の事實に基きて多少の思慮を費さば、理會し得可き程度の問題を與へ、絶えず、彼等に自ら判斷するの習慣を得しめん事を要す。

判斷と教科 判斷も亦、概念と同じく、あらゆる教科に於て練習し得可しと雖も、習字及び圖畫は最も簡單なる練習法なり。蓋し、與へられたる手本と、自己の書畫せしものとを

比較し、其の異同を決定せしむるは、即ち、一種の判斷作用に外ならず。**手工及び遊戯**も、此の練習に適す。又兒童に作文せしめ、若くは、既に教へたる事項を語らしむるが如きは、分析作用の練習に適し、**理科**を授くる場合、並に**數字**の説明の如きは、總合作用に適す。教師は、適宜に之を應用して、一は、舊智識の内容を明晰にし、一は、新智識の範圍を擴張す可し。

正確なる判斷 正確なる判斷は、(一)概念の正確なる事、(二)記憶の精密なる事、(三)判斷す可き對象の各方面を考察する事に由りて得らる。教師は教授の際、是等の事項に、注意せん事を要す。

信念と疑惑 概して言へば、信念は、判斷を助け、疑惑は、之を

妨ぐ。然れども疑惑は時として、確實なる信念の基となる事あり。故に教師は、巧に問答法を利用し、兒童を導きて、日常の經驗にも、疑問を發せしめ、奮ひて、之を正當に、解釋せんとの衝動を強からしむ可し。

歸納推理 一般に、理科の教授には、歸納法を用ゐる場合多し。例へば、**理化學**の教授に、先づ實驗を施し、生徒をして、精密に觀察せしめ、且つ、其の結果を判斷せしむるが如き、或は**博物科**に於て、同種の動植物數種を觀察せしめ、其の必要な類似點を抽象して、一般の法則を發見せしむるが如きは、何れも歸納法の應用なり。凡て、兒童の幼稚なる程、教授には、歸納的方法を用ゐるを可とす。

演繹推理 **修身科**の教授には、演繹法を用ゐる場合多し。

例へば、一の格言を教へ、之に基きて、種々の場合に應用す可き方法を決定せしむるが如し。蓋し、格言は古人が多く、の經驗を積み、て歸納したる一般の法則なり。故に格言には權威あり。然れども、其の中には、高尚にして、兒童に理會し難きもの少なからず。且つ、今日に適切ならざるものもある可し。故に教師は、假令演繹法に依りて教授する場合にも、よく注意して、兒童精神發達の程度と、其の境遇とに鑒み、最も適切なるものを選ぶ可し。

比論臆説の應用 比論及び臆説も、適當に應用すれば、著しく、兒童の觀察力を鋭くし、且つ、思想を精密にするの利あり。例へば、實物教授の際、兒童をして、自ら二物の類似點を發見せしめ、之に由りて、全體を判斷せしむるが如き、又は、或る問

題を與へて、之を解釋するに、兒童に相當したる臆説を立てしむるが如し。

考 案

- (一) 判斷と教授法との關係。
- (二) 判斷と教科との關係。
- (三) 正確なる判斷を得る方法。
- (四) 信念と疑惑との判斷に及ぼす影響。
- (五) 歸納演繹兩法と教科との關係。
- (六) 比論及び臆説の應用。

第三十二章 情操(科學及び美術)

情操 情操は抽象的概念に伴ひて生ずる感情なり。故に此の情は、情緒の如く、直接に、自己の利害に關する事なく、純

粹に對象の爲めに感情を解發す。例へば、眞理の爲めに眞理を喜び、善美の爲めに善美を愛するの類なり。情操の主なるもの、四種あり。知情、美情、徳情、宗教的情操是れなり。**知情** 吾人、若し、未だ曾て、經驗せざりし事物に接する時は、假令、自己に、直接の關係なき物も、之を異しみ、之を知らんことを欲するを常とす。此の欲求を稱して**智識慾**といふ。科學は此の欲求に基きて生じたるなり。疑惑は智識慾に満足を與へざる一種の苦痛にして、吾人は百方之を免れんことを努む。是れ、即ち眞理を發見せんとする努力なり。而して、其の目的を遂げ得たる時は、一種言ふ可らざる**快樂**を覺ゆ。是等の感情を總稱して、**知的情操(知情)**といふ。此の情は、新奇なる物に對して生ずる**驚異、好奇心**等に由りて

發達す。知情はあらゆる理智作用に伴ひて發動す。一事を回想せんと欲して苦心し、回想し得て安慰するが如き、或は一事を判斷せんとして苦慮し、適當の判斷を得て満足する等は、何れも、此の情操の發現なり。知情の美情及び徳情と異なるは、前者は**事實**の判斷に基き、後者は、**價値**の判斷に基く點にあり。

知情の教育 凡そ、智識の教育は、最初適當に好奇心を利用し、兒童をして、智識其の物の爲めに、勉學するの習慣を養はしめん事は、教育上、特に、必要なり。決して席次若くは點數等の爲めにのみ勉學せしむ可らず。是等は畢竟**間接興味**にして、智識教育の補助たるに過ぎず。兒童をして、自ら苦心して**思考**し、**研究**し、**經驗**して、事物を分明に了解し得たる

時の快樂の爲めに、奮ひて、學事に心を寄せしむ可し。是れ即ち、**直接興味**を養ふ所以なり。

美情 吾人日常自然物若くは、人工物を經驗するに際し、直接の利害、又は、實用の如何に關せず、單に其の色彩、形狀、音聲、運動及び是等に基きて構成せられたる思想等より導かれ、溫和にして、比較的に永續し得る快感を生じ、特に、多くの人と共に、之を經驗する時は、一層其の快感を強うす可し。是れ即ち、美情なり。故に、美情は、快感の一種なれども、直接の利害を離れ、それ自ら目的たるものなり。例へば、滋味は快樂なれども、自己の生活に、直接の關係ある味覺の満足より生じたれば、美情と稱す可らざるが如し。然れども、兒童及び未開人は、美と快とを混同す。眞の美を知りて、之を愛

するは、經驗の進み、智識の増すに従ひて、生ずる現象なり。

感情移入 知覺又は想像の客觀的對象に、吾人の主觀的感情を投入して其の完全なる統一を意識する作用を感情移入といふ。斯る心狀は、美意識に於て最もよく現はる。例へば春の花を笑ふと見秋の雨を悲しむと聞くが如し。

此の如き經驗は、單に冷なる態度にて花を見、雨を聞くとは、大に異りて、溫なる感情の主要素たるを知る可し。感情移入は、同情及び擬人法と相類せりと雖も、又、自ら異なる所あり。同情は主として道德に關し、有情の物に專らに、擬人法は、想像に基き、理智作用に由る。然るに感情移入は、其の對象の有情たると、非情たるとを問はず、之に對して直ちに自己の感情を輸入すなり。故に、一に、之を感情の客觀化といふ。

趣味 吾人が或る事物を經驗して、美醜を分つは、一種の判斷作用に外ならず。斯る美的判斷を趣味と名づく。故に

趣味は、精神發達の程度に應じて、高低の差あるを免れず。趣味の標準は之を、感覺的、智力的、理想的の三種に分ち得可し。(一) **感覺的要素**は、視覺聽覺より來る快感をいふ。(二) **智力的要素**は、觀察、比較等の作用によりて、感覺要素の排列適否を判斷するをいふ。(三) **理想的要素**は、更に、之に伴ふ理想の判斷をいふ。趣味は、以上の次第を追ひて進む。

美の種類 吾人、若し、春風駘蕩の日に、大宮人が櫻かざして遊べる狀を、巧に寫して、太平の氣象を現はしたる繪畫を見れば、美感の解發を禁じ得ざる可し。是れ、即ち**優美**なり。又波浪洶湧巉巖突兀の光景に對せば、凄然たると共に、一種言ふ可らざる快感を覺ゆる事ある可し。是れ、即ち**壯美**、**崇高感**なり。又戯曲、小説等に於て、不權衡なる材料を巧に、配合

せるを見て、可笑感を生ずるは**滑稽美**にして、悲しきが中にも、美しきを感じずるは、**悲哀美**なり。美に反せるを**醜**といふ。

(一) **優美** 優美の要素に、**實質**と**形式**(排列法)との二種あり。

實質は**形狀**(建築、彫塑、風景、色彩、繪畫、風景)、**音聲**(音樂、運動、舞蹈)、**思想**(詩歌、小説等)にして、形式は左の數種なり。是等の區別は何れの美にも適用し得可し。

均齊 人類の身體に於ても、草木の幹枝に於ても、左右對等なるが爲めに、美を現はす場合多し。均齊の稍變じて、三と五との如き比を保てる形狀を美とするを**金截法**といふ。

比例 凡そ、形ある物には、各部分の權衡あり。此の權衡を失へる物は、**不格好**たるを免れず。人體を畫くも、體軀に比して、四肢の大に過ぐるも、小に失するも共に、其の美を損す

可し。

調和 個々に檢すれば美なる物も、全體として調和せざれば美を害す。又、個々にては美ならざる物も、全體に好く調和し、却つて、美觀を呈する事あり。

變化 總て美感の對象たる物は變化あるを要す。何物にても、變化を缺かば、美を害す可し。就中、音樂より生ずる美情は、變化より導かるゝ場合殊に多し。

統一 美的材料の排列は、一定の目的を現はさん事を要す。假令、一見錯雜せるが如き物にても、其の間に統一を認むる時は、美を感じるものなり。之を**雜多中の統一**といひて、調和と共に、形式要素中の主要なるものなり。

以上の諸形式は、何れの美術にも必要なが、繪畫に於て、特

に著しく認め得可し。第四十三圖は、有名なる伊太利の畫工ラファエル Raphael 1483-1520 の畫きし物にして、あらゆる點に於て、形式美の模範なりと稱せらる。

(二) **壯美** 壯美は、美感と恐怖との相混じたるものなり。此の情は、左の場合に生ず。

空虚 存在す可き物の存在せざる場合には、其の事情に由りて、壯美を感じる事あり。例へば、暗黒及び寂寥なる場所、沈黙せる人物に接せる場合の如し。

宏大 強大なる勢力、廣漠たる空間等は、何れも壯美の對象となり得可し。

無限 行列の限り無く連續せる、古物の限りなく永存せる、同一物の限りなく多き等は、何れも壯美の情を起すに足れ

り。
(三)滑稽美 滑稽美は、美情と、不權衡感との相混じたるものなり。詩歌文章戯曲等に於て、所謂喜劇的の物は、此の情を起さしむ。

笑 笑は滑稽の表出なり。然れども、笑には、此の他に、(一)全く生理的なるものと、(二)柔和の情の表出に屬するものとあれば、互に區別せざる可らず。是等は、智識に關係なく現はるれども、眞の滑稽の笑は、美と不權衡とを認め得る智識を有する者に非れば、現はれず。

(四)悲哀美 悲哀美は、美感と、不當感と相混じて、其の對象に同情するより起る情にして、戯曲小説等に於て、假構の人物が、不正の苦しみを受くるを見聞して、生ずるを常とす。若

し、實事ならんには、實感となりて、美の性質を失ふ可し。
(五)醜 醜は、主として、優美に反するものなり。是れ、亦、吾人の美的經驗に缺く可らざる要素たり。吾人は、事物の醜を感ずるに由りて、一層明かに美を感ずるなり。

考 案

- (一) 情緒と情操との別。
- (二) 知情の特質。
- (三) 知情養成法。
- (四) 美情の特質。
- (五) 趣味の説明。
- (六) 美の種類。
- (七) 雑多中の統一の實例。

第三十三章 美情の教育

美育 美情は、人の品性に關する事著しきものなれば、家庭及び學校に於ては、兒童日常の言行に注意し、漸次に高尚なる趣味を養はしめん事を努む可し。殊に、學校に於ては圖書音樂等の教授に由りて、兒童が野卑なる繪畫俗曲を喜ぶの衝動を防ぐ可く、時としては郊外に伴ひて、自然の美觀に接せしめ、或は美術館音樂會等を利用して、人爲の美術を知らしむ可し。又常に、心を用ゐて庭園及び建築物等の美觀を愛護せしめざる可らず。身體衣服の清潔なる可きは勿論、書籍器具等の配置にも、整然たる秩序あらしめ、卑しき言語、粗野なる舉動を避けしむ可し。要するに、美情の教育は

趣。味。の。教。育。な。り。趣味は、前章に述べたるが如く、人品の高下に從ひて、種々の相異あり。野卑の繪畫俗曲等を喜ぶは趣味の低きに由る。教師は、先づ、自ら趣味を高尚にして、兒童を導かざる可らず。

氣育 兒童及び女子は、壯大の物に對すれば、恐怖して美を感じざるを常とす。然れども、よく、心身を鍛鍊して、是等の物に對する抵抗力を養ひ、且つ、其の恐る可きにあらざる事を知らしめば、よく、此の感情を起すに至る可し。我が國の自然界は一般に優美に富みて、壯美に乏しけれども、山地の兒童に、大洋の渺茫として一望限りなく、遠く蒼天と合する光景を見しめ、海邊の兒童に、高山の悠々として、萬古に亙り、遙に白雲を擘くの偉觀に對せしめば、又以て壯美を養ふの

資となすに足らん。山は時間的に悠久に、海は空間的に無限なり。無限と悠久と共に壯美の要件たり。其の他英雄烈女が人の成し難く、堪へ難き事を敢てしたるの大勇猛心に感激せしむる等、壯美の教材、必ずしも乏しからず。要するに、是等は、古人の所謂氣を壯にするの教にして、人の志操を高尙に導かんが爲めには、緊要なる事なり。凡て、壯美は個人の發達の初めに現はれずして、其の中間に現はれ、既にして、其の對象に慣熟すれば、復、現はれざるに至る。故に、氣育は、壯美を喜ばしむると共に、漸く之に就きて、無感覺ならしむるものなり。

笑の應用 笑は、精神を發揚せしめ、消化を助け、神經を休め且つ、社交を圓滑ならしむる等、其の效、頗る多し。故に、教育



Raffaël Santi, Madonna.

上にも、野卑ならざる滑稽は、適當に之を用ゐるを可とす。然れども、濫用すれば、往々、人の品格を損するが故に、之が應用には、深く注意せざる可らず。

考 案

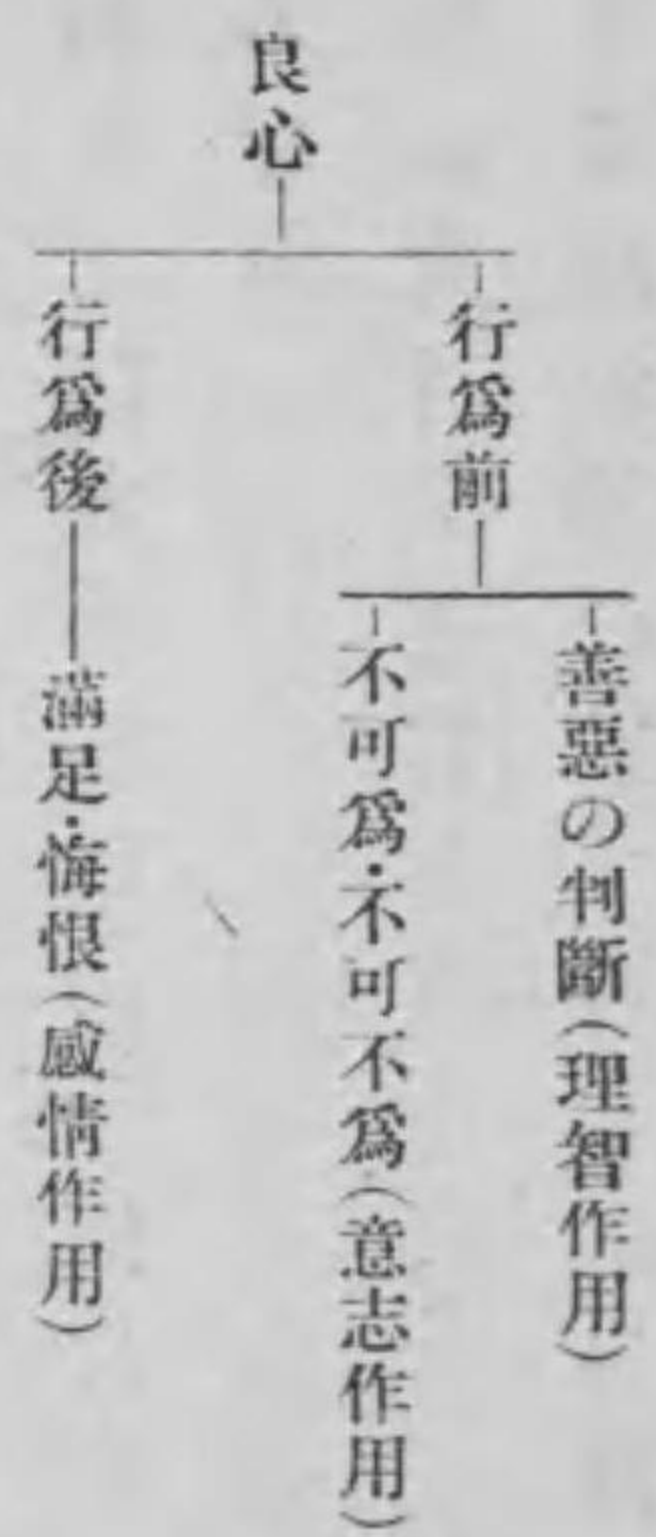
- (一) 美情と品性との關係。
- (二) 壯美の情を養ふ注意。
- (三) 滑稽の利害。

第三十四章 情操(道德及び宗教)

社會的情操 道德的意識は、社會的關係より起る。吾人、若し、單獨に此の世に生存せば、此の意識は發生せざる可し。是れ道德的感情を社會的情操と呼ぶ所以なり。
良心 吾人は、通常、自己及び他人の行爲に對して、直覺的に

善惡の判斷を下し、善に對しては、満足賞讃し、惡に對しては、悔恨非難するものなり。又或る事情に遭遇したる場合には、之に就きて「爲す可らず」「爲さざる可らず」と深く心に感じ、通常、其の感じたるが如くに行動す。是等は、即ち良心の作用なり。然れども、良心は、特別の精神作用にあらず、唯、吾人の全精神が、道德的現象を對象とする時に、現はるゝ作用に名けたるなり。故に、良心は、即ち道德的意識にして、個人精神の、社會と接觸しつゝある間に、次第に發達するものなり。良心の分解 良心の判斷は、即ち理智作用なり。又、此の判斷より「爲す可らず」「爲さざる可らず」と感ずるは、所謂本務心にして意志作用に外ならず。又、既に、或る事を行ひたる後は、或は満足し、或は悔恨す。是れ、即ち感情作用なり。之を

以て良心の全精神作用より成れるを知る可し。



良心の發達 人が、他の動物と異なる主要なる點は、良心の發達す可き伏能を有するに在り。良心は、全く、天賦に非ず。又全く一代の經驗にも非ず。伏能に基き、修養經驗に由りて、發達するものなり。兒童の幼稚なる間は、此の作用未だ現はれず、唯父母長上の教訓、示例等、他律的勢力に従ひて、行動するのみ。然るに、日々同一事を、反復して行へる間には、之を行はざれば、自ら、心に不快を覺ゆるに至る可し。是れ、

即ち、本務心の始にして、良心發達の端緒なり。斯くて、教育を受け、經驗の重なるに従ひ、智力も漸く進み、一定の理想形成せらるゝに至れば、善惡の標準明かに、廉恥の情強くなりて、良心は益、確實に進む。茲に至れば、自律的道德心成立せるなり。

徳情の特質 徳情には、左の特質あり。

- (一) 徳情は、意志的行爲に關してのみ起る。凡そ、意志なき行動に對しては、其の結果の如何に關はず、道德的價値を認めざるなり。
- (二) 徳情は、實行的性質を帶びたり。吾人の良心事の善惡を判別する時は、善の爲す可く、惡の爲す可らざることを感ぜしむる情操盛んに起りて、實行を促すを常とす。

(三) 徳情は、直接に、社會に影響す。知情及び美情の如きは、其の性質、唯、各自の主觀に於ける感動に止まりて、必ずしも、實行を伴はざるが故に、社會に直接に影響する事、比較的に少し。然れども、徳情は、行爲に關係するが故に、直接に、社會に影響す。

德育 德育は、良心の發達過程に従はざる可らず。故に、教育者は、兒童をして、先づ善良なる習慣を養はしめ、且つ、道德的直觀を得しむ可し。即ち、實際の善行を見聞せしめ、之を愛し、之を賞讃するに至らしむ可し。斯くて、次第に進みて、道德的表象及び概念を増加せしめ、且つ、道德的判斷を練習せしめ、終に、此の世には、何人も、之が實現に努む可き、最後の**大目的**あり。之を實現する爲めには、何人も守らざる可ら

ざる倫理法の存する事を知らしめ、之に従はざれば、著しく苦痛を感じるに至らしめん事を要す。

境遇と権力 人心は、周囲の状況に動かさるゝものなるが、就中、家族及び朋友の**感化**は、最も強大なり。故に、兒童の徳育は、唯之を學校に放任する事なく、深く、是等の影響に注意せざる可らず。又、父母、教師、其の他兒童を支配する者の**権力**も、徳情に影響すること大なり。幼兒の下す善惡の判断は、概ね、長上の命令訓誨を標準とするを見て知る可し。良心は、精神の遺傳的伏能に、幼時より受けたる**境遇と権力**との影響加はりて生ずるものなれば、教育者は、宜しく、一定の主義方針を以て、教育に従事す可し。若し、己が、一時の感情に任せて、或る時は禁止し、或る時は許可するが如き事あら

ば、兒童の心中には、確乎たる善惡の觀念成立せず、従ひて良心の力弱く、廉恥の心薄かる可し。

宗教的情操 宇宙は、廣大無邊にして、吾人人類の測り知る可らざる事甚だ多し。是等不可思議なる物、若くは、其の偉大なる勢力に對して、**畏敬**すると共に、又之を**嘆美**し、之に**信賴**するは、即ち、宗教的情操の起源なり。而して、其の不可思議とする對象は、人智の進歩と共に、次第に變化す。例へば、奇異なる物體を崇め、自然力を敬ひ、**靈魂**を尊び、**神佛**を拜むの類なり。要するに、人類が自己の微弱なることを知り、實在の力の宏大なることを信じて、之に歸依するは、即ち、**宗教心**なり。

宗教的情操の性質 此の情は、甚だ複雑なり。唯、自己の救

を求むるは、**主我的情緒**なれども、一般人類の運命に關する意味に於ては、**社會的即ち倫理的情操**なり。又、實在の性質を認むるによりて起る情は、**知的情操**にして、其の美麗壯大に感ずるは、**美的情操**なり。故に宗教心は、あらゆる情操の複合によりて、人類が完全なる理想に、憧憬するの現象なりとす。

倫理と宗教 右の如く、宗教心は、あらゆる情操と密接の關係あれども、就中、倫理的情操とは、特に、深き關係あり。是等二種の情操は、其の初に在りては異なる性質を有し、個々に發達したるものなる可しと雖も、今日の進歩せる社會に於ては、其の關係親密にして、殆ど分つ可らざるに至れり。宗教は、倫理的修養に由りて、一層、其の信仰を高尚にし、倫理

は宗教的信仰に由りて、一層、其の性質を莊嚴にす。

考 案

- (一) 良心作用の分解。
- (二) 良心發達の次第。
- (三) 徳情の特質。
- (四) 徳育の次第。
- (五) 宗教的情操の性質。
- (六) 倫理と宗教との關係。

第三十五章 意志作用

意志の性質 吾人、日常の事を爲すには、習慣に由り、特殊の思慮無くして行ふ場合多し。然れども、少しく複雑なる事に遭遇すれば、必ず、思慮を運らし、自ら、最も適當なりと思へ

る方法に由りて、之を行ふ可し。是れ其の初、本能及び衝動より漫然と解發せし動作の、進みて意志的行爲となれるなり。意志的行爲には、四種の過程あり。動機思慮選擇決定、是れなり。

動機 凡そ、行爲には、必ず目的の表象あり。此の表象に快樂の感情加はりて、欲求の衝動となる時は、之を動機といふ。故に、動機は、目的表象と感情との結合せるものなり。前者を靜的要素といひ、後者を動的要素といふ。動機は唯一なる場合のみならず、種々の動機、同時に現はれて、互に相争ふことあり。

思慮及び選擇 親しき友の來りて、其の身の困難を告ぐれば、吾人は、先づ、之を救ふ可きか、**第一動機**或は救はざる可き

か**第二動機**を考ふ可し。是れ、即ち、思慮なり。斯くて、之を救はんと定めたりとせよ。是れ、即ち、**目的の選擇**なり。而して、之を救ふに種々の手段現はる可し。之を志向といふ。是等の志向に就きて、亦、吾人は、孰れを選択す可きかを思慮す可し。思慮は、凡て、二個以上の動機の、互に相争ふ状態をいひ、選擇は、其の一を擇ぶをいふ。思慮と選擇とは相伴ふを常とす。

決定 斯く思慮したる結果、二種以上の目的、若くは、志向中より、一を選択して、之を實現せんと決すれば、茲に、決定の現象を生ず。行爲は、決定の後に現はるゝ動作なり。目的を執行せんとする最後の意志を、特に**執意**と呼ぶことあり。**意志の兩面** 意志には、積極と消極との兩方面あり。吾人

が一事を決行する爲めに、運動を起すは、前者に屬し、又、一旦決定したる事も、其の場合が之を實行するに不可なるを思ひ、行爲に現はさずして止むは、後者に屬す。二者相待ちて、吾人の行爲は、全きを得るなり。日常生活に於ては、積極的意志著しく注意せらると雖も、消極的意志に由りて、主觀的活動に終る動機志向の數、極めて多し。吾人は之に由りて生の安全を保ち、社交の平和を得る場合少からず。

意志は、又、内外兩方面に分ち得可し。外的意志は、外部に現はるゝ行動にして、内的意志は、單に意識過程の作用に止まる。前述の消極意志及び一般に注意を有意的に緊張する場合等は、孰れも内的意志の活動なり。

意志と習慣 意志作用は、一般に意識的、思慮的にして努力を要す。然れども、同一の行爲、屢、反復せらるゝ時は、習慣と

なりて、殆んど、努力を要せず、器械的に行はるゝに至る事、前に説けるが如し。(第十六章 参照)是れ精神經濟の法則に従へるなり。精神作用中、意志は最も習慣形成に適す。善意の習慣となり、努力を要せずして、善行をなし得るに至れるは、即ち徳の成立せる者なり。

考 案

- (一) 慾望と意志との別。
- (二) 意志過程。
- (三) 意志の兩面。
- (四) 徳の成立。

第三十六章 意志の教育

意志養成法 意志作用を教育せんには、先づ、身體を鍛鍊す

可し。隨意筋は意志の機關なり。之を鍛鍊して、適當に發達せしめざれば、意志は、其の作用を現はす事能はず。又、知と情とを適當に修養して、意志の基礎を作らざる可らず。最初に注意す可きは、動機なり。兒童をして、常に、正しく、且つ適當なる動機を起さしめんには、**目的表象**に注意せん事を要す。**第一**には、兒童の智識に適當し、彼等の理會し得るものたる可し。**第二**には、其の情緒に適當し、彼等の喜ぶものたる可し。**第三**には、道德上有效のものたるか、少くとも無害のものたる可し。而して、目的の表象、即ち行爲の結果を豫想せしめ、之を得んと感情刺激、充分、其の心中に起らば、次には、彼等をして、如何なる手段に據りて、之を得ば最も適當なるかを思慮せしむ可し。少年期の動機は、概ね、自己

中心にして、**活動權力名譽の愛**、或は**競争心**等より動かさるる場合多し。青年に至りて始めて**輿論**を参考し、若くは、進みて、全く自己の**良心**に従ふに至る。是等は教育上、特に意を用ゐて、其の正當なる發達を助く可きなり。**思慮の習慣** 兒童は、一般に思慮する事少なく、漫りに衝動及び**欲望**に従ひて、行動する者なれば、適當なる指導を要す。**第一**には、目的を定め、之を遂ぐるには、如何にして可なるかを、兒童各自に語らしむ可し。**第二**には、斯くして得たる答案を批評す可し。**第三**には、其の中に就きて孰れの考が適當なるかを、兒童各自に選擇せしむ可し。**第四**には、其の選擇せしものをば、各自の決定として、實行せしむ可し。而して訓練の結果、短少の時間に思慮し盡し得るに至らしむ可

きなり。更に、注意す可きは、思慮の性質を、正確なる理智的判斷たらしめ、一旦決定せし事は、斷然決行するの勇氣を養はしむ可きことなり。若し、思慮中に、不正なる感情の加はる時は、決定を弱めて、薄志弱行の人となる可し。されば、平生、正とし、善として教へられたる事、及び自己の知見に於て、正當と判斷したる事には、猶豫なく服從して疑はざるの習慣を得しむ可し。假令既に實行しつゝある行爲たりとも、一旦其の非を曉らば、直ちに之を止め、或は實現せんとする強き衝動をも、消極的に之を抑制する力を養はしめざる可らず。斯くせんには、兒童をして、よく父母教師の命令訓誨等の意義を理會せしめ、之に従ふ事、猶自己の思慮決定よ

り。出でたるが如くならしめん事を要す。而して一旦、彼等の理會せし上は、嚴格に、之が實行を促して、毫も、假借する所無かる可し。

第五編 心理法及び自我

第三十七章 心理法

活動原理 以上に記したるは、文明の社會に生れ、健康なる身心を有せる人類に普通にして、教育上、主要なる精神現象の概略なり。然かも、猶、其の材料は、頗る複雑なり。更に、之に變態的精神現象を加へ、且つ、一般に、詳細に記述せば、其の事項は、實に無量に上るべし。斯く複雑なる精神現象も、決して漫りに發現するに非ず。仔細に觀察すれば、皆一定の法則に従へり。是れ精神の活動原理にして、即ち、心理法則なり。此の法則は、大別して、關係法及び發達法の二種とす。**關係法** 凡そ、吾人の精神現象は、互に相關係して現はれ、之

に由りて次第に複雑に進む。之を關係法といひ、三種に分

つ。
 (一) **總合法** 表象の聯合、類化、想像、思想作用等に於ては、總合法、特に著しく現はる。吾人の認識作用は、現在の對象を既有の經驗に總合することに由りて成立す。

(二) **分解法** 分解法は、總合法の補助的法則なり。元來是等の兩作用は、相待ちて行はるゝを常とす。總合作用を正しく行はんには、精細に分解して、其の異點を明らかめざる可らず。此の作用は、概念の構成に於て、著しく現はる。例へば、二個以上の對象の性質を分ちて、相互に比較するは、即ち、此の作用なり。凡そ、精神作用は、分解に由りて、精密に進む。

(三) **對比法** 分解法が、總合法の補助たるが如く、對比法は、又

分解法の補助たり。凡そ、精神作用は、分解したる個々の要素を對比せしむる事に由りて、益、明晰を加ふ。此の事實は、感情に於て、特に著しく現はる。例へば、苦樂は、對比して益明なるが如し。其他感覺も亦、對比に由りて明晰を加ふる事、既に説けるが如し。

發達法 此の法は、關係法より生じて、精神の發達に應用せらる。精神も、身體と同じく、一定度までは、絶えず發達す。其の法則を發達法といひ、三種に分つ。

(一) **精神成長法** 吾人の精神作用は、生の初より、死の終に至るまで、連続して行はる。熟睡及び假死の場合には、意識は缺けたりとも、精神作用は行はれつゝあるなり。之を連續原理といふ。精神は、連續に由りて成長す。成長法は、總合

法と密接の關係あり。兒童の精神は、總合作用に由りて、次第に、其の内容を豊富にし、其の機能を複雑にす。

(二) 目的複雑法 此の法は、分解法と、密接の關係あり。隨ひて、總合法とも關係す。凡そ、吾人の精神は、目的に由りて發動する場合多し。而して、其の發達するに従ひ、目的は、次第に複雑に進むを常とす。例へば、兒童が感覺の刺激に由りて、反射的に外物を把握するは、明瞭なる目的表象なく、單なる衝動より起れども、精神作用稍進みては、其の外物を把握する前に、一定の目的を生じ、其の實現の爲めに運動を生ずるに至る。更に進みては、一層複雑なる目的の爲めに、之を把握する事ある可し。斯る事實は、意志作用に於て著し。故に、此の法則の應用は、德育に於て、最も必要なり。

(三) 反對發達法 是れ、對比法の應用なり。例へば、兒童が初めに、苦痛を経験したるが爲めに、後に快樂を経験するに及びて、其の強度の一層著しきが如し。此の事實は、斯る一時的現象に止らず、個人の生涯に於ても、又、社會の發達に於ても、明かに現はる。吾人が、兒童より成人に進む間には、律動的に精神の對比的現象生じ、次第に變化するものなり。又、社會の進歩も、或る時期と前後の時期とは、其の文化の狀態に對比現象多きを常とす。

教育上の注意 此の書の初より説きたる、教育上に應用す可き點は、皆、以上の二大法則と、六細則とに則りたるなり。教育者は、常に、心に是等の法則を銘記し、之を以て、兒童を導くの方針とす可し。特に、總合・分解・對比の法は、教授法即ち

智識を授くる方法の原理として必要なり。又、精神成長法は、児童心理學の發達に由りて、益明かなるに至りたれば、教育者は、須く此の法則の應用に注意し、適當なる教育を施さざる可らず。目的複雜法と、反對發達法とは、意志と感情とに關すること著しければ、品性修養の上に應用す可し。例へば、初は、殆んど、無目的若くは單純なる目的にて行へる事も、次第に、其の高く深き意味を知らしめ、終に個人の行爲は、皆、人生の大目的の爲めなる事を知るに至らしむるが如し。又、一時、兒童に或る惡傾向ありとて、決して、失望す可らず。反對發達の法則を考へ、常に、其の對比的變化に注意す可し。

考 案

(一) 關係法の説明。

(二) 發達法の説明。
(三) 心理法應用の實例。

第三十八章 自我(上)

自我 上來說明せる精神の作用及び法則等は、宛も一種の外物に就きて研究したるが如くなれども、其の實は、何れも皆、自己心中の事なり。よく、自ら反省して、研究すれば、必ず其の事實を發見し得可し。畢竟するに、如上の各章は、分解的に、各自の精神作用を記述せるものにして、自我は、其の總合統一に名けたるものなり。今、先づ、發達の順序に隨ひて此の概念を説明せん。

自我概念の發達 吾人、嬰兒の頃は、自己の身體と、他の物體との區別明ならずして、屢、身體を外物として取り扱ひ、或は

之。を。打。ち。或。は。之。を。咬。む。こ。と。あ。り。然。れ。ど。も。其。の。度。毎。に。苦。痛。を。感。ず。る。の。み。な。ら。ず。外。物。に。觸。る。よ。し。は。其。の。感。覺。の。異。る。よ。り。漸。く。外。物。と。自。我。と。を。區。別。す。る。に。至。る。之。に。加。ふ。る。に。外。物。は。經。驗。の。經。過。に。從。ひ。て。絶。え。ず。變。化。す。れ。ど。も。自。己。の。身。體。は。常。に。同。一。に。保。た。れ。實。は。代。謝。作。用。盛。ん。に。行。は。る。れ。ど。も。意。識。に。は。上。ら。ず。且。つ。之。よ。り。生。ず。る。有。機。感。覺。も。同。一。經。驗。を。連。續。し。て。反。復。す。る。を。以。て。外。物。と。の。差。異。は。益。明。な。る。に。至。る。然。れ。ど。も。此。の。際。自。我。意。識。を。明。瞭。な。ら。し。む。る。は。他。の。自。己。の。認。識。な。り。兒。童。は。外。形。の。差。及。び。刺。激。に。對。す。る。反。應。の。異。る。よ。り。生。物。と。無。生。物。と。を。分。ち。更。に。動。物。と。人。類。と。を。分。つ。而。し。て。他。の。人。類。の。言。行。と。自。己。の。と。を。比。較。す。る。事。に。由。り。て。自。我。は。一。層。明。瞭。の。度。を。加。ふ。さ。れ。ば。兒。童。は。朋。友。と。交。は。る。に。

至。り。て。自。己。意。識。確。立。し。自。ら。一。人。稱。の。代。名。詞。を。用。る。る。に。至。る。者。な。り。要。す。る。に。自。己。意。識。の。發。達。も。理。智。生。活。の。發。達。に。伴。ふ。こ。と。な。れ。ば。其。の。初。は。感。覺。的。知。覺。的。に。自。己。を。意。識。す。此。の。際。に。は。前。に。述。べ。た。る。が。如。く。皮。膚。覺。有。機。感。覺。視。覺。等。の。團。體。に。過。ぎ。ず。而。し。て。視。覺。に。基。く。要。素。は。啻。に。身。體。の。み。な。ら。ず。衣。服。裝。飾。等。凡。て。自。己。に。屬。す。る。物。之。に。加。は。る。然。る。に。理。智。の。發。達。思。想。階。級。に。進。み。抽。象。的。概。念。の。形。成。せ。ら。る。に。及。べ。ば。自。己。意。識。も。亦。多。く。の。經。驗。よ。り。抽。象。せ。ら。れ。て。複。雜。な。る。内。容。を。統。一。す。る。純。然。た。る。概。念。と。な。る。に。此。に。至。り。て。自。己。は。主。觀。的。と。な。り。一。切。の。内。面。生。活。を。代。表。す。人。格。自。己。が。外。物。と。自。己。と。を。分。つ。概。念。な。る。が。如。く。人。格。は。人。類。の。自。己。と。他。の。生。物。の。自。己。と。を。分。つ。特。殊。の。概。念。な。り。

故に、人格と自我とは、元來同一主體の別名に過ぎず。唯、前者は、自我に、他の生物のそれと區別すべき條件の加はりしのみ。

人格の要素中、其の主なるもの、左の如し。

(一) 内省的意識 自。ら。自。己。の。内。面。生。活。を。省。察。し。得。る。事。は。人。格。成。立。の。先。行。要。件。た。り。若し、此の要件を缺かば、其の他の事項は行はれざる可し。幼兒の人格が不完全なるは、内省の不可能なるを主なる原因とす。

(二) 統一 過去の自我と、現在の自我とを同一のものと意識し、且つ現在複雑なる意識の内容を以て、一自我の活動に歸するは、何れも統一の作用なり。

(三) 自己決定 凡そ、吾人一定の發達を遂げたる後は、其の云

爲、全く自己の自由なる事を感じ可し。假令、外界より如何なる壓迫を受くるも、之に従ふと否とは、一に各自の自由なり。之を自由意志といふ。吾人の道德的動物たる所以は、之あるを以てなり。責任の觀念が、人格の中心たるも亦自由意志に基く。

人格の向上 之を系統發生的に觀るも、將た、之を個體發生的に察するも、人はあらゆる生物中、最もよく向上發展する者なり。

すゝみても、進みても、なほ、進まんと、

望むや、人の心なるらん。

此の如き、衝動は、殆んど、人類に特有なる天賦の性能なりと雖も、其の最も有力なるは理想の刺激なり。吾人は、常に、現

在。を。超。越。し。た。る。完。全。な。る。對。象。を。心。中。に。畫。き。之。に。到。達。せ。ん。と。し。て。努。力。す。而。し。て。其。の。畫。き。た。る。理。想。の。實。現。せ。ら。れ。た。る。場。合。に。は。更。に。一。層。高。き。理。想。に。憧。憬。す。此。の。如。く。に。し。て。長。へ。に。進。み。て。止。ま。ざ。る。は。即。ち。人。生。な。り。若。し。現。實。に。滿。足。し。て。理。想。の。之。を。導。く。こ。と。無。く。ん。ば。人。格。は。長。へ。に。向。上。發。展。す。る。こ。と。無。か。る。可。し。凡。そ。人。物。の。高。下。人。格。の。尊。卑。等。概。ね。理。想。の。如。何。に。基。く。こ。と。な。れ。ば。其。の。教。養。に。は。特。に。心。を。用。ゐ。る。可。ら。ず。

自覺 人格の向上には、更に自覺を要す。自覺には、三種の段階あり。(一)は、人格の要件たる内省的意識を経験する事なり。此の自覺は、通常學齡期の後半に於て現はる。凡そ吾人は、内省に由りて、最もよく自己を認識し、正當に、之を評

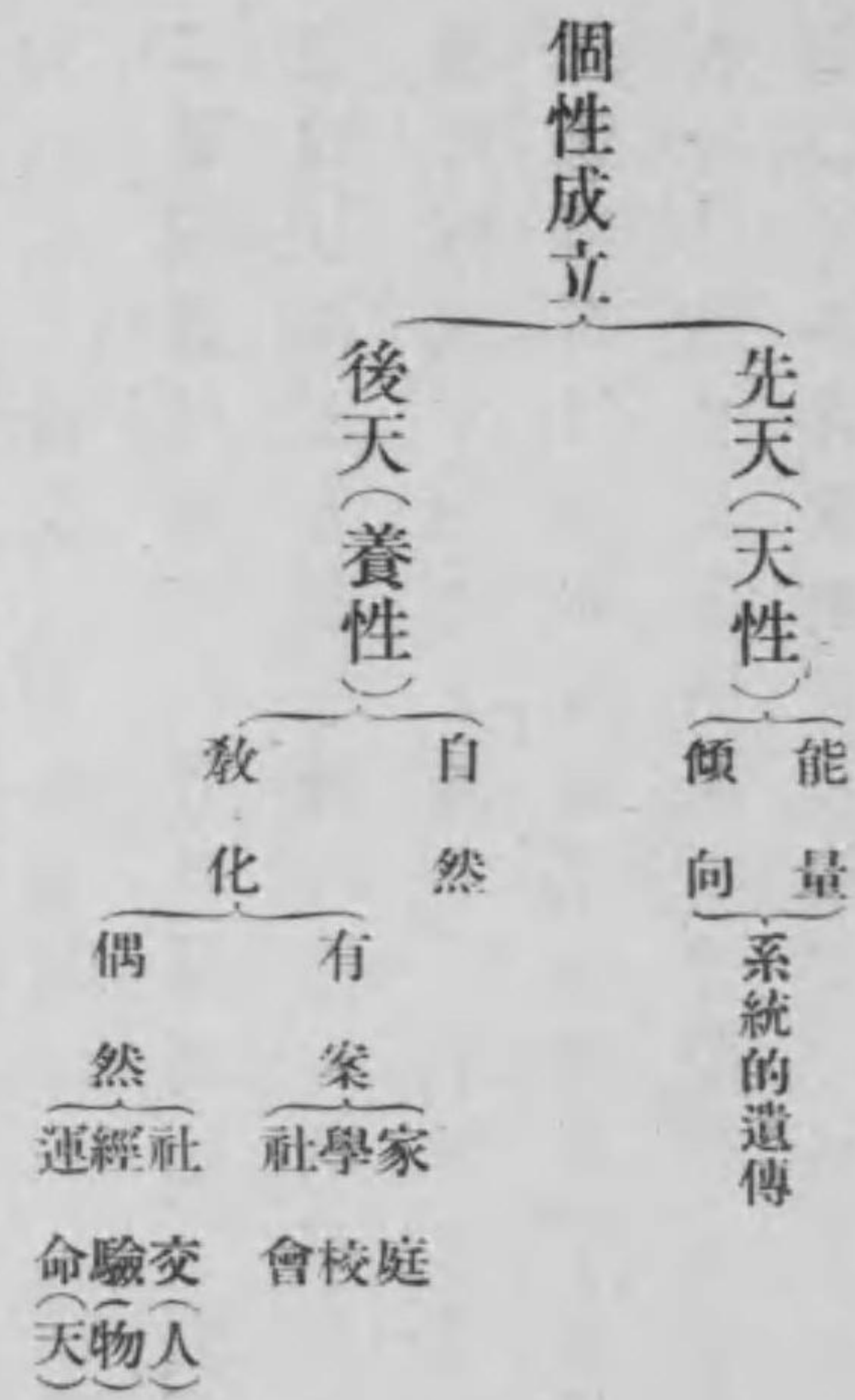
價し得可し。内省は、即ち反省なり。反省なき生活は進歩なき生活なり。(二)は、社會上に於ける自己の地位を明確に認識することなり。吾人は、此の種の自覺に由りて、よく自己の社會的責任を曉り、新しき生活の意義を發見す。此の自覺は、青年期に入りて現はるゝを常とす。(三)は、自己と絶對との關係を認識する事なり。宗教上の信念は、此に至りて確立す。自我(人格)は、實に此の如くにして、次第に向上す。

第三十九章 自我(下)

個性 自我の特殊性を個性といふ。一の自我と、他の自我とを區別するは、個性に由る。各人の精神作用は、大體に於て一致せりと雖も、其の個々の部分に至りては、各人各様に

して、互に相異なるを常とす。之を**人差(個人的差異)**といふ。蓋し、吾人は異なるる遺傳を稟けて生産し、異なるる境遇に異なるる**經驗**をなして生長する者なれば、互に相異なるは怪むに足らざるなり。個性の**先天的要素**は、**能量**と**傾向**に分たる。能量は、將來發展す可き天分の多少をいひ、傾向は、其の活動の發現する方向をいふ。前者は理智生活に於て、後者は感情生活に於て、著しく現はる。氣質は之に基きて定めらるゝなり。個性の後天的要素は、**自然**と**社會**との感化なり。天地山川等、自然界の影響は、前者に屬し、家庭學校の教育及び社會の教化等は、後者に屬す。又吾人は各種の**運命**の下に、各種の**社會的經驗**をなし、之が爲めに、個性に大なる影響を受く。是等後天的要素は、意志生活に著しく影

響す。性格は、之に由りて成立するなり。



稟賦 先天に有する理智的特性を稟賦といふ。吾人能量の差は、稟賦に於て、最もよく現はる。感覺・知覺・記憶・想像・思想等の諸作用が、人々に由りて異なる事、及び其の能否強弱の差は、稟賦に基く事多し。個性に於ける**理智的特性**は、其の

根柢稟賦にあり。

氣質 身體的傾向に基ける感情の態度を氣質といふ。古來、多血、膽液、氣鬱、神經、粘液の四種に分つ。

(一) 多血質に屬する者は、反應速く、興奮し易けれども、強度弱くして永續せず。樂天的にして、活潑に、他に雷同し易し。

(二) 膽液質に屬する者は、反應速く、興奮し易く、強度強し。厭世的なれども、發動的にして、敢爲の氣象に富み、永く同一感情に固執すること無し。

(三) 氣鬱質に屬する者は、反應遅く、容易に興奮せず。然れども、一旦起りたる感情は、持續して移り難し。厭世的受動的にして、不活潑なり。

(四) 粘液質に屬する者は、反應興奮共に遅く、感情は變化し難

く、強度弱し。受動的にして、樂天的傾向を有す。吾人は、是等の氣質を單獨に有する事少く、概ね、數氣質混合せり。唯、或る氣質の特に著しく現はるゝを以て、よく區別し得るなり。氣質は、常に個人的に異なるのみならず、同一の人も、年齢の進行と共に變化するを常とす。例へば、幼時は

氣質	反應	興奮	持續	強度	傾向
多血	速	易	短	弱	快(樂天)
膽液	速	易	短	強	不快(厭世)
氣鬱	遅	難	長	強	不快(厭世)
粘液	遅	難	長	弱	快(樂天)

多血質なるも、青年期には氣鬱質、壯年期には膽液質となり、

老年に及びては、再び氣鬱質より進みて粘液質に傾くの類なり。又兩性の差異、及び種族の差異に由りて、氣質的傾向を異にす。

氣質説の起原 古昔希臘に、萬物は風土火水の四元素より成り、是等の元素は冷温燥濕の四質を有すとの説行はる。當時の大醫ヒッポクラテス Hippocrates (紀元前四六〇——三七五之を人體の臟器に配當し、各臟器は

元素の混合	臟器	液體	氣質
温(火) — 燥(土)	肝	黄膽汁	膽汁質
温(火) — 濕(水)	心	血液	多血質
冷(風) — 燥(土)	脾	黑膽汁	氣鬱質
冷(風) — 濕(水)	腦	粘液	粘液質

以上の性質を有する液の調和に由りて、健康を保つとの説を立てたり。

其の後之に基きて、羅馬の醫師ガレン(Calen. 紀元一三〇——二〇〇)四氣質の説を立つ。今日にては是等の説は、固より信す可らずと雖も、四氣質の名稱は、其の儘繼承せられて、感情傾向の分類に用ゐらる。

性格 練習に由りて、意志が、一定の形式を有するに至れるを性格(品性)といふ。吾人、幼時より、種々の行爲を反復する間には、多くの習慣を生ず可し。是等の習慣が、一定の道德主義に基きて形成せられたるを徳といふ。道德的性格は、各人の有する徳の總量なり。性格は、啻に、道德的のみならず、意志の方向に従ひて、種々の別を生ず。例へば、各種の職業及び社會的宗教的習慣の差異等に由りて、其の性格に變化を生ずるの類なり。然れども、一般に性格を分つ時は、其の強度に由りて、強弱の別を立て、其の性質に由りて善惡の

別を立つるを常とす。

性格と氣質 兩者は、互に密接の關係ありて、實際には、一の連續的過程として現はると雖も、又之を區別し得可し。氣質に於ては、情意は無意識的衝動的に現はるれども、性格に於ては、思慮的選擇的に現はる。然れども、意志は、常に感情の先行を要するが故に、性格も亦氣質に影響せらるゝことを免れず。比較的、是等の影響より獨立し、意志の一定形式に隨つて行爲するは、即ち性格の強固なる者なり。之に反して、一定の主義信念なく、感情に由り、利害に由りて、言行を二三にする者は、性格の薄弱なる者なり。

考 案

- (一) 自我概念の發達。

- (一) 人格の要素。
 (二) 人格の向上及び自覺。
 (三) 個性成立の次第。
 (四) 稟賦氣質、性格の説明。
 (五) 稟賦氣質、性格の説明。

第四十章 人格の完成

教育の目的 教育の目的に關しては、古來多くの説あれども、要するに、**人格の完成を期するに在り**。換言すれば、人たる所以を完うせしむるに外ならず。

教育の方法 此の目的を達せんが爲めには、種々の方面に對ひて、複雑周到なる注意を要す。身體の健全は、生存の要件なれば、教育者は、兒童の體育に努むべく、又あらゆる精神作用を普遍的に、生長發達せしむるは、人たるに缺く可

らざる事たり。本書に説きたる知情意の作用を兒童發達の程度に應じて、充分に啓發せしむるは、即ち此の目的を達する所以なり。知育、情育、美育、意育、德育の名目は、之より生ず。又、體育に對しては、是等の三育を合はせて、心育といふも可なり。體育と心育とは、互に相關係して、離る可らず。體育は、生理に基けりと雖も、亦心理作用と密接の關係あり。個性の養護と鍛鍊。教育に於て、各人を、全く同一に養成せんことは、不可能なり。加之、同一の時代に生まれ、同一の教育を受くるに拘らず、各人、各異の點あるは、即ち、自我の存在に必要な事なれば、教育に於ては、最も、個性を重んず可く、漫りに、之を滅却するが如き、方法を取る可からず。普通教育に於ても、兒童の學力を平均せんとするは、或る程度に止

む可く、絶対に如何なる學科にも、完全ならん事を強ふ可からず。又、氣質性格に關しても、教育者は自己と類型の者のみをよく理會して、他を疎外するの弊を避く可し。個性の養護は必要なりと雖も、一面には、又、其の偏傾せる者をば、之を矯正し補塞するの道を講ぜざる可らず。個性の基く所は、天稟に由ると雖も、元來個性は、必ずしも絶対に不變なるものにあらず。鍛鍊に由りては、よく之を變化し得可し。是れ即ち、人に修養の大切なる所以なり。人格の完成。吾人は、世に立ちて、種々の關係を有する者なり。此の關係の何れの方面に對ひても、自我の存在を完うし、個性を確かめ得るに至りて、人格は完成せらる。吾人は個人として、自己の安全幸福發達を圖る可きは、言を待たず。

世界の人としては、全世界の發達、進歩に貢獻す可く、國家の人としては、我が國家の益、隆盛ならん事に努む可く、家庭の人としては、我が家族の安寧、幸福ならん事を圖る可し。而して、是等の目的を達する爲めに、吾人は、必ず先づ職業の人たらざる可らず。職業は、人格の發現に缺く可らず。抑も、吾人が、人として、世に立ち得るは、以上の各方面に、關係を有するが爲めなり。吾人の人格は、是等の關係に由りて成立し、吾人は、各自の自我中に、是等の關係を統合す。斯くて、身體も、精神も、健全に發達し、あらゆる力をあらゆる方面に伸べて、自己と共に、人類全般の幸福と進歩とを助け得るは、即ち、完全なる人格にして、教育の極致も、亦、此に在り。而して、兒童を導きて、此の域に至らしむるは、教育者の任にして、其

の方法は、教育的心理學の指示する所なり。

考 案

- (一) 教育の目的及び方法と心理學との關係。
- (二) 個性養護の必要及び其の方法。
- (三) 人格完成の狀態。

教育的心理學 終

日英獨佛心理學語彙

(A)	(日)	(英)
Aijō. (Ai)	愛情(愛)	Love.
Anji. (Shisa)	暗示(示唆)	Suggestion.
(B)		
Bijutsu.	美術	Fine arts.
Bunkai.	分解	Analysis.
(C)		
Chi.	知	Intellect.
Chikaku.	知覺	Perception.
Chishiki.	智識	Knowledge.
Chōwa.	調和	Harmony.
Chūi.	注意	Attention.
Chūshō. (Shāshō)	抽象(捨象)	Abstraction.
(D)		
Dan-an.	斷案	Conclusion.
Dōjō.	同情	Sympathy.
Dōki.	動機	Motive.
Dōnō.	動能	Conation.
Dōsi.	動作	Action.
Dōtoku.	道德	Moral.
(E)		
Eū-eki.	演繹	Deduction.
(F)		
Fumu.	憤怒	Anger.

(獨)	(佛)	(頁)
Liebe.	Amour.	101.
Suggestion.	Suggestion.	129.
Schönekunst.	Beaux arts.	219.
Analysis.	Analyse.	252.
Intellekt.	Intellect.	44.—81.
Wahrnehmung.	Perception.	105.
Erkenntniss.	Connaissance.	2.
Harmonie.	Harmonie.	226.
Aufmerksamkeit.	Attention.	44.—
Abstraktion.	Abstraction.	200.
Schluss.	Conclusion.	201.—
Sympathie (Mitgefühl)	Sympathie.	160.
Motiv.	Motif.	242.
Konation.	Conation.	92.
Aktion.	Action.	242.
Moral.	Morale.	233.
Deduktion.	Déduction.	212.
Zorn.	Colère.	156.

(G)	(日)	(英)
Gaien.	外延	Extension.
Gainen.	概念	Conception.
Gakusetsu.	學說	Theory.
Gengyo.	言語	Language.
Gijigo.	擬似語	Onomatopöia.
Gijin.	擬人	Personification.
Giwaku.	疑惑	Doubt.
Go.	語	Word.
Gutai. (Gushō)	具體(具象)	Concrete.
(H)		
Handan. (Dantei)	判斷(斷定)	Judgement.
Han-Ishiki.	半意識	Subconsciousness.
Hansei.	反省	Reflection.
Hattatsu-hō.	發達法	Law of Development.
Henkwa.	變化	Variety.
Henkō.	偏向	Inclination.
Hiai-bi. (Higeki)	悲哀美(悲劇)	Tragedy.
Himpu.	稟賦	Aptitude.
Hinsei. (Seikaku)	品性(性格)	Character.
Hirei.	比例	Proportion.
Hiron.	比論	Analogy.
Honnō.	本能	Instinct.
Hyōshō.	表象	Representation.
四 (I)		
Ikei.	畏敬	Veneration.
Ishi.	意志	Will.
Ishiki. (Shiki)	意識(識)	Consciousness.

(獨)	(佛)	(頁)
Umfang.	Extension.	201.
Begriff.	Conception.	199.
Theorie.	Théorie.	214.
Sprache.	Langage.	190 —.
Onomatopöie.	Onomatopoeé.	295.
Personifikation.	Personification.	149.
Zweifel.	Doute.	216.
Wort.	Mot.	296.
Konkret.	Concret.	206. 299.
Urteil.	Jugement.	208.
Unterbewusst.	Subconscient.	31.
Reflexion.	Réflexion.	3.
Gesetz der Entwicklung.	Loi de développement.	253.
Varietät.	Variété.	226.
Neigung.	Inclination.	226.
Tragödie.	Tragédie.	182.
Begabung.	Aptitude.	265.
Charakter.	Caractère.	269.
Proportion.	Proportion.	225.
Analogie.	Analogie.	213.
Instinkt.	Instinct.	95.
Vorstellung.	Représentation.	47. 105.
Elrfurcht.	Vénération.	157.
Wille.	Volonté.	44. 91. —. 241. —.
Bewusstsein.	Conscience.	30.

(J)	(日)	(英)
Jiga.	自我	Ego.
Jijitsu.	事實	Fact.
Jikaku.	自覺	Self-consciousness.
Jikan.	時間	Time.
Jikken.	實驗	Experiment.
Jikokanjō.	自己感情	Self-feeling.
Jinkaku.	人格	Personality.
Jiritsushinkei.	自律神經	Autonomic nerve.
Jiyū.	自由	Freedom.
Jō. (Kanjō)	情(感情)	Feeling.
Jōcho.	情緒	Emotion.
Jōchōgo.	情調語	Tone Language.
Jokihō. (Kiokujutsu).	助記法(記憶術)	Mnemonics.
Jōsō.	情操	Sentiment.
(K)		
Kachi.	價值	Value.
Kakkwan. (Kankwan)	覺官(感官)	Sense.
Kakkwan. (Kakutai)	客觀(客體)	Object.
Kanjō-Inyu.	感情移入	Objectification of feeling. (Empathy)
Kankaku.	感覺	Sensation.
Kankaku-Kanjō	感覺感情	Sense-feeling.
Kansha.	感謝	Gratitude.
Keiken.	經驗	Experience.
Keishiki.	型式	Type.
Kettei.	決定	Decision.
Kibun. (Tanjō)	氣分(單情)	Mental Mood.
Kinō.	歸納	Induction.
Kinsei.	均齊	Symmetry.
Ki-oku.	記憶	Memory.

(獨)	(佛)	(頁)
Ich.	Moi. (Soi-Même)	251. —.
Tatsache.	Fait.	2.
Selbstbewusstsein.	Conscience de soi-même.	262.
Zeit.	Temps.	113.
Experiment.	Expérience. (Recherche, Étude)	45.
Selbstgefühl.	Sentiment de soi-même.	158.
Persönlichkeit.	Personnalité.	259.
autonomes Nerv.	Nerf autonome.	21.
Freiheit.	Liberté.	261.
Gefühl.	Sentiment.	44. —, 80. —.
Affekt.	Emotion.	150.
Tonsprache.	Langage émotionnel.	195.
Mnemonik.	Mnémotechnie.	219.
Gesinnung.	Sentiment. (esthétique etc.)	233.
Wert.	Valeur.	221.
Sinn.	Sens.	51.
Objekt.	Objet.	3.
Einführung.	Objectivation du Moi.	223.
Empfindung.	Sensation.	47. 51. —.
sinnliches-Gefühl.	Sentiment sensible.	84.
Dankbarkeit.	Reconnaissance.	162.
Erfahrung.	Expérience.	1.
Typus.	Type.	132. 167.
Entscheidung.	Decision.	243.
Stimmung.	Humeur.	85. —.
Induktion.	Induction.	211.
Symmetrie.	Symétrie.	225.
Gedächtnis.	Mémoire.	125. —.

(K)	(日)	(英)
Kishitsu.	氣質	Temperament.
Kōi.	行爲	Conduct.
Kōkishin.	好奇心	Curiosity.
Kokkei. (Kigeki)	滑稽(喜劇)	Comedy.
Kokoro. (Seishin)	心(精神)	Mind.
Kosei.	個性	Individuality.
Ku.	苦	Pain.
Ku.	句	Sentence.
Kūkan.	空間	Space.
Kwagaku.	科學	Science.
Kwankeihō.	關係法	Law of Relation.
Kwannen.	觀念	Idea.
Kwansatsu.	觀察	Observation.
Kyōfu.	恐怖	Fear.
Kyōiku.	教育	Education.
Kyōkaku.	共覺	Synæsthesia.
Kyokusho-chōken.	局所徵驗	Local sign.
Kyōmi.	興味	Interest.
(M)		
Meidai.	命題	Proposition.
Miburigo.	身振語	Gesture Language.
Mogi.	摸擬	Imitation.
Mokuteki.	目的	End.
Muishiki.	無意識	Unconsciousness.
(N)		
Naibumpitsu.	內分泌	Inner Secretion.
Naisei.	內省	Introspection.

(獨)	(佛)	(頁)
Temperament.	Tempérament.	266.
Handlung.	Action moral. (Conduit)	243.
Neugier. (Wissbegier)	Curiosité.	99.
Komödie.	Comédie. (Rire)	228.
Geist.	Âme.	1.
Individualität.	Individualité.	263.
Schmerz.	Douleur.	80.
Satz.	Phrase.	196.
Raum.	Espace.	107.
Wissenschaft.	Science.	219.
Beziehungsgesetz	Loi de relativité.	251.
Idee.	Idée.	47. 105.
Beobachtung.	Observation.	4.
Furcht.	Peur. (crainte)	251.
Erziehung.	Education.	37. —. 73. 88. 136. 148. 168. 196. 204. 215. 230. 245. 127.
Synæsthesie.	Synesthésie.	70.
Lokalzeichen.	Signes Locaux.	109.
Interesse.	Intérêt.	40. —.
Proposition.	Proposition.	208.
Gebärdensprache.	Langages de gestes.	193.
Nachahmung.	Imitation.	97.
Zweck. (End)	Fin. (but).	242. 254.
Unbewusst.	Inconscient.	30.
innere Sekretion.	Sécrétion interne.	22.
Selbstbeobachtung.	Introspection.	3. 260.

(N)	(日)	(英)
Naiyō.	內容	Content.
Nango.	喃語	Babbling.
Nō. (Nōzui).	腦(腦髓)	Brain.
(O)		
Okusetsu.	臆說	Hypothesis.
(R)		
Raku.	樂	Pleasure.
Reikwatsu.	令活	Animation.
Rekikaku.	癢覺	Tickle sensation.
Rengō.	聯合	Association.
Rinri.	倫理	Ethics.
Risō.	理想	Ideal.
Ritsudō.	律動	Rhythm.
Ruijiritsu.	類似律	Law of Similarity.
Ruikwa. (Tōkaku)	類化(統覺)	Apperception.
Ryōshin.	良心	Conscience.
(S)		
Sakkaku.	錯覺	Illusion.
Seichō.	成長	Growth.
Seiheki.	性癖	Propensity.
Sekkinritsu.	接近律	Law of contiguity.
Sentaku.	選擇	Choice.
Shigeki.	刺激	Stimulus.
Shikō.	志向	Intention.

(獨)	(佛)	(頁)
Inhalt.	Contenu.	201.
Lallen.	Balbutier.	195.
Gehirn.	Cervelle. (Encéphale)	19. —.
Hypothese.	Hypothèse.	213.
Lust.	Plaisir.	80.
Belebung.	Animation.	149.
Kitzelempfindung.	Chatouillement.	59.
Assoziation.	Association.	126.
Ethik.	Éthique.	240.
Ideal.	Idéal.	154. 261.
Rhythmus.	Rythme.	33.
Gesetz der Aehnlichkeit.	Loi d'association par re- semblance.	127.
Apperception.	Apperception.	106.
Gewissen.	Conscience.	238. —.
Illusion. (Täuschung)	Illusion.	119. —.
Wachsthum.	Croissance.	46. 253.
Hang. (Neigung)	Propension.	182.
Gesetz der Berührungs- assoziation.	Loi d'association Par contiguité.	128.
Wahl.	Choix.	242.
Reiz.	Stimulus.	14. 92.
Absicht.	Intention.	243.

(S)	(日)	(英)
Shinkei.	神經	Nerve.
Shinkeigen.	神經原	Neuron.
Shinnen.	信念	Belief.
Shinrigaku.	心理學	Psychology
Shinrihō.	心理法	Mental Law.
Shiryō.	思慮	Deliberation.
Shisō.	思想	Thought.
Shitsui.	執意	Volition.
Shū.	醜	Ugliness.
Shuga.	主我	Egoism.
Shukwan.	主觀	Subject.
Shūkwan.	習慣	Habit.
Shūkyō.	宗教	Religion.
Shumi.	趣味	Taste.
Shuta.	主他	Altruism.
Sōbi.	壯美	Sublimity.
Sōgō.	總合	Synthesis.
Sonkei.	尊敬	Respect.
Sōzō.	想像	Imagination.
Suimin.	睡眠	Sleep.
Suiri.	推理	Reasoning.
(T)		
Taihi.	對比	Contrast.
Teigi.	定義	Definition.
Tetsugaku.	哲學	Philosophy.
Tōitsu.	統一	Unity.
Tokuisei.	特異性	Idiosyncrasy.
Tsūkaku.	痛覺	Pain Sensation.

(獨)	(佛)	(頁)
Nerv.	Nerf.	10. —.
Neuron.	Neurone.	10.
Glaube.	Croyance.	216.
Psychologie.	Psychologie.	1. 7. 8.
Psychisches Gesetz.	(Loi mentale. Loi psychique.)	251.
Ueberlegung.	Délibération.	242.
Gedanke.	Pensée.	47. 187.
Wollen. (Volition)	Volition.	243.
Hässlichkeit.	Laidur.	229.
Egoismus.	Egoisme.	158.
Subjekt.	Sujet.	3.
Gewohnheit.	Habitude.	99. 244.
Religion.	Religion.	233.
Geschmak.	Goût.	229.
Altruismus.	Altruisme.	160.
Erhabenheit.	Sublime. (Sublimité)	227.
Synthese.	Synthèse.	81. 252.
Achtung.	Respect.	162.
Phantasie.	Imagination.	142.
Schlaf.	Sommeil.	29.
Schliessen.	Raisonnement.	142. 210.
Kontrast.	Contraste.	70. 252.
Definition.	Définition.	I.
Philosophie.	Philosophie.	205.
Einheit.	Unité.	260.
Idiosynkrasie.	Idiosyncrasie.	72.
Schmerzempfindung.	Sensation de douleur.	59.

(U)	(日)	(英)
Undō.	運動	Movement.
(W)		
Warai.	笑	Laugh.
(Y)		
Yōkaku.	痒覺	Itch Sensation.
Yokubō.	慾望	Desire.
Yozō	餘像	After Image.
Yūbi. (Bi)	優美(美)	Beauty.
Yūgi.	遊戲	Play.
Yune.	夢	Dream.
(Z)		
Zettai.	絕對	Absolute.

(獨)	(佛)	(頁)
Bewegung.	Mouvement.	94.
Lachen.	Rire.	228. 233.
Kitzelempfindung.	Sensation de zale.	59.
Begehrung.	Désir.	179.
Nachbild.	Image consécutive.	69.
Schönheit.	Beauté.	225.
Spiel.	Jeu.	98.
Traum.	Rêve.	146.
Alsolut.	Absolu.	82.

大大明明明明明
 正正治治治治治
 四五四三三三
 年十年十十十
 十十八八六四一
 月月月月月月
 三廿七四十一八五
 一八二二二二二
 日日日日日日
 參參增增訂訂發印
 訂訂訂訂正正
 冊冊冊冊十再
 八八四四版版
 版版版版發發
 發行行行行行

著者

高島平三郎

發行者

東京市日本橋區本銀町三丁目二番地
 株式會社 啓成社

印刷所

東京市牛込區榎町七番地
 日清印刷株式會社



發行所

電話本局二一〇〇番
 振替東京二〇五五番

東京市日本橋區本銀町三丁目二番地
 株式會社 啓成社

參訂教育的心理學奧付

定價金七十錢

262
881

終

